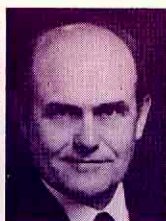


# 聖徒の道 5 1983





## 末日聖徒イエス・キリスト教会

### 大管長会

スペンサー・W・キンボール  
マリオン・G・ロムニー  
ゴードン・B・ヒンクレー

### 十二使徒評議員会

エスラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
ハワード・W・ハンター  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・バックナー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ベリ  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト  
ニール・A・マックスウェル

### 顧問

M・ラッセル・バラード  
ローレン・C・ダン  
レックス・D・ビネガー  
チャールズ・A・ディディエ  
ジョージ・P・リー  
F・エンツィオ・ブッシュ

### 編集長

M・ラッセル・バラード

### 国際機関誌

編集主幹：  
ラリー・A・ヒラー  
編集副主幹：  
デビッド・ミッチェル  
子供の頁編集：  
ボニー・ソーンダース  
デザイナー：  
ロジャー・ギリング  
制作：  
ノーマン・ブライス

## もくじ

救い主の教えに従う……………	N・エルドン・タナー……………	1
質疑応答……………	エドワード・L・ソーパー……………	7
思いやりある伴侶……………	テランス・D・オルソン……………	11
エロール・ベネット●タヒチサツ カー界のスターが示した勇気……………	ミカエル・オターソン……………	17
かけがえのない時……………	アーデス・G・カップ……………	28
主イエス・キリストを信じる信仰……………	ジーン・R・クック……………	34
1日1個のりんご……………	リチャード・M・ロムニー……………	46
一番大切なこと……………	F・エンツィオ・ブッシュ……………	53
しんこうってなあに……………	キャロライン・キャンベル……………	58
エリヤと神の力……………		62
ローカルページ……………		65
モルモネード……………		表3

■表紙：デビット・リンズレイ画

1983年5月号 聖徒の道 第27巻第5号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-10-30  
電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社  
定価 年間予約/海外子約2,200円(送料共)  
半年予約1,100円(送料共)  
1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA 0573JA Printed in Tokyo, Japan.  
© 1983 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注:お届け先の変更がありましたら、早急に渋谷ブックセンターにご連絡下さい。●「聖徒の道」のご注文・お支払いなどの連絡先……〒150 東京都渋谷区桜丘町28-8/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部渋谷ブックセンター/☎03-464-1617(代)

# 救い主の教えに従う

副管長 N・エルドン・タナー

**今** すべての人はその生き方を変え、イエス・キリストの教えに従って生活するよう、かつてなく強く求められています。新聞を読んでも、テレビやラジオのニュースを聞いても、人と



日	月	火	水	木	金	土	日
1	2	3	4	5	6	7	
8	9	10	11	12	13	14	
15	16	17	18	19	20	21	
22	23	24	25	26	27	28	
29	30	31					

※このメッセージは、タナー長老の亡くなる一カ月前の1982年11月27日に準備されたものです。

## ● 救い主の教えに従う

話をしても、内外の情勢、隣人や自分自身の個人的な問題に至るまで、気の滅入ることばかりです。

私たちはため息まじりに言います。「一体全体これから先どうなるのだろう。」人々をこのような状態に至らせた国やその他の指導者は一体どうしたのでしょうか。いつからこのようなことになってしまったのでしょうか。

イエス・キリストの福音が教える様々な原則をよく学び、自分たちの生き方が、福音の中で教えられている真理と一致したものでないことを認識するなら、その答えが分かります。自分の生き方を通して人々に感化を与え、正しい方向へ向かわせるようにするのは、私たち一人一人の責任です。人々は私たちの良い行ないを見て、天の父をあがめるようになるのです。よく言われることですが、正しい人々が何もしなければ、それだけで悪は勝利を治めることができるのです。

一人一人がイエス・キリストの教えに従うなら、私たちは全世界 500 万の教会員と共に、世の人々により影響力を及ぼすことができます。またそうしなければなりません。罰を受けないように、そしてキリストのみ前から追ひ払われないようにするためには、イエスを救い主として受け入れ、その戒めに従うしかありません。人はいつになったらこのことを理解するようになるのでしょうか。私たちは主がその大いなる

自分の生き方を通して人々に感化を与え、正しい方向へ向かわせるようにするのは、私たち一人一人の責任です。

愛のゆえに、全人類のために自らの命を捧げて下さったことを知っているのですから、主とそのみ言葉を受け入れ、主に感謝と愛の気持ちを示すよう最大の努力をしなければなりません。

主が地上におられた時に語られた言葉を幾つか注意して見てみましょう。山上の垂訓の中の言葉です。

「それだから、これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれるであろう。





わたしは言っておく。あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていないければ、決して天国に、はいることはできない。」(マタイ5:19-20)

この説教の後の方ではこう言われています。

「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である。

狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからは行って行く者が多い。

命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。」(マタイ7:12-14)

そして、この説教を次のように結んでいます。

「それで、わたしのこれらの言葉を聞いて行うものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができよう。

雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れることはない。岩を土台としているからである。

また、わたしのこれらの言葉を聞いても行わない者を、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができよう。

雨が降り、洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけても、倒れてしまう。そしてその倒れ方はひどいのである。」

イエスがこれらの言を語り終えられると、群衆はその教にひどく驚いた。

それは律法学者たちのようではなく、権威ある者のように、教えられたからである。」(マタイ7:24-29)

イエス・キリストの教えと行ないを記したマタイの記録を読み、どうして主が地上に来て、教えと導きを施されたのか、その大切な目的を学ぶのは非常に素晴らしいことです。聖典を読みながら、「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす」(モーセ1:39)というキリストの使命を理解できない人がはたしているものでしょうか。表現は様々に異なりこそすれ、その使命について主は幾度となく語られたのです。不死不滅と永遠の生命を得るには、キリストとその御父を愛し、隣人を愛するという原則を実践しなければなりません。主が説かれた教えはすべて、私たちを幸福にし、より充実した豊かな生活を得させるためのものであり、神のみもとで永遠の生命にあずかるという究極的な約束を伴うものです。忠実な人に約束されている祝福を軽く考えたり、またその祝福を受けるにふさわしい者になろうとせず、この受け継ぎを危うくしている人が多いのはどうしたことなのでしょうか。

マタイの記録の中には、自ら選ばれた12人の弟子たちに教えを授け、邪悪な人々に悔い改めを叫び、たとえ話によって群衆に教え、また、病む者を癒し、死者をよみがえらせるなどの業を行なわれたキリストの姿が描かれています。キリストは御自身の教会を組織し、背教のあることを警告し、

## ●救い主の教えに従う

天父から託された使命を果たされました。そして十字架にかけられ、葬られた後よみがえったのです。それはすべて、キリスト御自身が、また過去の予言者たちが予言したことでした。

それらは皆事実となりました。これもまた予言されていたことなのですが、イエス・キリストの福音が、原始教会とまったく同じ組織を持つ教会を伴って回復されたのです。新旧約両聖書は共に回復があることと、モルモン経の出現を明らかにしています。末日聖徒イエス・キリスト教会が組織されて間もなく、ジョセフ・スミスは自ら信仰箇条と呼んだ、教会の教えを簡単にまとめたものを作りました。それは救い主が在世中に残された教えと完全に一致するものです。

教会の信条を見事に表現したその最後の条、第13条にはこう書かれています。

「われらは、正直、真実、貞潔、慈善、高德なるべきこと、およびすべての人に善を行うべきを信ず。まことにパウロの訓戒に従うというを得べく、われらはすべてのことを信じ、すべてのことを望む。すでに多くのことを堪え忍びたれば、あらゆることを堪え忍び得んことを望む。もし何にても、徳高きこと、好ましきこと、よき聞えあること、あるいは養むべきことあらば、われらはこれらをたずねもとむるものなり。」

この宣言には、救い主が自ら実践し、雄雄しい働きを通して人々にも教えようとき

れた徳のあらゆる面が言い表わされています。子供たちはこれを暗記するように言われ、宣教師は名刺に印刷しています。私たちはこのような素晴らしい理想を説く組織に属することを誇りにし、よく友人や求道者たちに説明します。

しかし私たちは、人前で口にするだけでなく、どれほどの決意をもって、これを実生活の中にもじめに、また正直な気持ちで取り入れようとしているでしょうか。私たちは皆、それぞれの生活を振り返り、混迷する世にあっても、戒めを守り、正しい模範となり、人々によい影響を及ぼすべく決心しなければなりません。正直、あるいは純潔、高潔であるという点に関して、大体とか、ある程度とかいうことはあり得ません。いやいやながら人に善意を示すというようなことができるでしょうか。私たちは自分のすべてを捧げなければなりません。心構えを変える必要があります。陰口、中傷、悪意に満ちたうわさ話などをやめ、互いに助け合わなければなりません。特に、地方政治、国政の分野で、正しい主張を支持する善良で正直な代表を選び、党派心を捨て、共に公益のために働く必要があります。口先だけでなく、私たちは「何にても、徳高きこと、好ましきこと、よき聞えあること、あるいは養むべきこと」をたずね求めなければなりません。

キリストが律法学者やパリサイ人に語った次の言葉によく注意して下さい。



私たちは皆、キリストの教会の会員として、平和、自分や子孫がより充実した生活を営むこと、主の戒めに従っていくために必要な力を求めています。

「『この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。

人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる』。」

それからイエスは群衆を呼び寄せて言われた、『聞いて悟るがよい。』

口にはいるものは人を汚すことはない。かえって、口から出るものが人を汚すのである。』（マタイ15：8—11）

マタイはまた、イエスを試みようとしたパリサイ人について書いています。

『先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか』。

イエスは言われた、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。

これがいちばん大切な、第一のいましめである。

第二もこれと同様である。「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ。」

これら二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている。』（マタイ22：36—40）

次にマタイ23、24章を見てみましょう。そこにはキリストの再臨に先立って起こる苦難や災害について書かれています。キリストのみ言葉に込められている思いを理解し、人類に対する主の愛を感じるができるでしょうか。それができたら、今度は人を罪から救い、墓からよみがえらせるために苦しみを受けて下さったことへの感謝の気持ちを、信仰と行ないによって示すよう心から努力しなければなりません。

あなたは次のキリストのみ言葉の中に、その憐みの深さを感じるができるでしょうか。

『ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人たちを石で打ち殺す者よ。ちょうど、めんどりが翼の下にそのひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それなのに、おまえたちは応じようとしなかった。』

見よ、おまえたちの家は見捨てられてし

## ●救い主の教えに従う



まう。

わたしは言うておく、「主の御名によってきたる者に、祝福あれ」とおまえたちが言う時まで、今後ふたたび、わたしに会うことはないであろう。」(マタイ23:37-39)

私たちは皆、キリストの教会の会員として、平和、自分や子孫がより充実した生活を営むこと、安らぎ、そして、主のみこころになかった生活をし主の戒めに従っていくために必要な力を求めています。では、私たちには何が求められているのでしょうか。

か。

神は言われる。

「あなたの仕事は世界を良くすること。」

私は答える。

「一体どうすればよいのでしょうか。」

世はかくも大きく広いのです。

これほどまでに乱れているのです。

私はあまりに小さく、力もありません。

私にできることなど何ひとつないのです。」

しかし神はその知恵をもって答えられる。

「よりよい自分を築きなさい。それだけで良いのです。」



## ホームティーチャーへの提案

担当家族との話し合いの中で、以下の点を強調するとよいでしょう。

1. 主が説かれた教えはすべて、私たちを幸福にし、より充実した豊かな生活を得させるためのものであり、神のみもとで永遠の生命にあずかるという究極的な約束を伴う。
2. 忠実な人に約束されている祝福を軽く考えたり、またその祝福を受けるにふさわしい者になろうとせず、この受け継ぎを危うくするようなことをしてはならない。
3. 自分自身の生活を振り返り、戒めを守る決心をする必要がある。

### ●話し合いを進めるために

1. 救い主の教えに従って生活することの大切さについて、自分の経験や感じていることを話す。また家族とも感じていることを話し合う。
2. このメッセージにある聖句や言葉で、家族と一緒に読み、話し合いたいものはないだろうか。
3. 訪問する前に、家長と話し合っておく必要はないだろうか。また救い主の教えについて定員会指導者や監督から家長に与えられたメッセージがないだろうか。



# 思いやり ある伴侶になる

テランス・D・オルソン



**私**たち家族はニューメキシコ北部の山へ数日間旅行をするため、荷造りをしていました。私は最後に残った子供を車に乗せ、食料を積み込んでいました。妻は玄関の所に出て来るとうれしそうに言いました。「さあ、これで準備完了よ。」彼女が玄関のドアをロックして閉めようとした時、私は自分の鍵を持っていないのに気づきました。「あつ、待って……閉めないで……」私はとっさにそう叫びましたが、後の祭りでした。

一瞬、私は腹立たしさを覚え、妻のせいだと言わんばかりに「鍵が家の中に置いてあるんだぞ!」と言いました。

幸いにも、鍵をかけ忘れていた窓があったため、さほど時間をかけずに家の中に入ることができ、私の気持ちは収まりました。

私は私の感情を害した妻を「許して」やりました。

後にこの経験を思い返してみても、私は自分自身の失敗を正当化するために、それを妻のせいにしてしまっていたことに気づきました。私は自分の抱いた悪感情によって妻を悪者にし、自分を哀れな犠牲者に仕立てていたのです。

実際のところ、私の感じた腹立たしさは彼女には何の責任もなかったのです。それは私自身が自分の行ないに対する責任を素直に受け入れようとしないうちから生まれたものであり、明らかに彼女は私の許しを受ける必要などなかったのです。——私の方こそ彼女の許しが必要でした。

私が抱いたそのような気持ちこそ本当に悔い改める必要がありました。もし彼女の



## 「イエス・キリストの福音こそ 結婚における様々な問題の解決法、 それも非常に実地的な解決法であると 私は確信しています。」

方が何か間違っていたのであれば、彼女が悔い改め私が許すことによって問題は解決していたでしょう。しかしこの場合、夫婦としての仲を取り戻すには私の方が悔い改めるだけで十分だったのです。しかも、たとえ彼女に責任があるがなかり、私自身が悔い改めること、つまり自分の中から憤りの気持ちをなくすことは必要であることを私は悟りました。つまり悔い改めをしないで（許すことをしないで）思いやりを持つことはできないということを知ったのです。同時にこのふたつの態度をとることはできません。

こうしたごくささいな出来事から、私たちは許し、愛、思いやりといった大切な真理を知ることができます。私はこうしたキリストを模範とした態度が結婚を取り巻く大小様々な問題に対処する基となることを知りました。そのような態度は非常に緊張した状態にある人々にさえ一致をもたらすことができるのです。

結婚および家庭問題専門のセラピストとして、私は時折結婚生活における問題を過大視し、もはやどうすることもできないと感じている人々に会います。フラッグ（仮名）姉妹もそのひとりです。彼女は愛のない結婚生活の中での虚無感を私にひしひしと訴えてきました。彼女にこれから一年後の生活を想像してもらい、どのような結婚生活を送っていると思うか話すように言う

と、彼女の表情は失望から絶望へと変わりました。彼女の中には決して今以上に良くなるはずがないという確信があったのです。自分にはもはや夫を愛する気持ちはなく、夫は冷淡で、無関心で、自分の世界ばかりに閉じ込められていると言うのです。夫は彼女のために時間をさくことはせず、ましてやふたりのための時間など望むべくもありません。暴力こそ振るいませんが、夫の心は自分から遠く離れてしまっていると言うのです。

フラッグ姉妹の場合には、次のような状態にあることが分かりました。(1) まったく望みのない状況に直面して無力感を味わっている。(2) 夫から孤立していることで情緒的に重圧を感じている。(3) 自分は環境の犠牲者であると思い込んでおり、夫の行動のゆえに自分は惨めな状態に追いやられていると信じている。(4) 福音を、実際に自分の状況には役立たない理想のもののみている。(自分の味わっている苦悩は、福音の原則は適用できない例外的なものであると言い張っているように見えます)

イエス・キリストの福音こそ結婚における様々な問題の解決法、それも非常に実地的な解決法であると私は確信しています。たとえ中には聖典の勧告を「抽象的」過ぎるとか「理想的」過ぎるといふ夫や妻がいたとしても、私は福音がいかにか個人や夫婦にとって幸福の源となり、結婚生活の問題



に対する解答を用意しているかをよく知っています。必然的に私はフラッグ姉妹に、3つの大切な福音の行ない、すなわち許し、愛、思いやりがいかに彼女と彼女の夫が問題を解決する上で役立つか説得に努めました。私は、かつて玄関の戸が閉まった時に腹立たしさを感じたのは妻の「せい」であると思ったように、フラッグ姉妹にも自分の惨めさを不当に夫の「せい」にしてはいないかを考えてもらいました。妻のせいであつたにしろそうでなかったにしろ、私自身のとつた態度を彼女のせいにするには間違っていました。私は怒りの気持ちを抱くことで、妻に対する思いやりの心を閉ざしていたのです。フラッグ姉妹の場合もこれと似ています。夫のせいであつたにしろそうでなかったにしろ、フラッグ姉妹の抱いた虚無感が、夫を思いやりの気持ちで見守れないことを訴える言い訳となっていたのです。

このように言ったからといって、私はフラッグ姉妹の夫には悪い点がなく、解決策は要するに彼女の考え方を変えるだけでいいなどと言うつもりはありません。しかし、自分の置かれた状況に対する彼女自身の見方にも問題があることを指摘しているのです。彼女は自分の無力さを訴え続けることで、かえって絶望感を深めているのです。

かりに、フラッグ姉妹が言っているように、ご主人が事実冷淡で無関心であつたと

しましょう。また彼女の話がなにもかも本当であつたとしましょう。それでもなお、彼女は福音の原則に添った生活をするにより、現状を改善するためにできることがたくさんあるはずで、夫がそれに対して反応を示し、変わってくれるという保証はどこにもありませんか？それでもなお彼女は虚無感や絶望感から抜け出して自分自身のために、より良い生活を築いていくことができるし、さらにはそれが夫にまで良い影響を与えるかもしれないのです。

このフラッグ姉妹のような状況にある人が、今抱えている問題に対して自分自身から何らかの手を打つことができるということに気づくなら、彼らは問題解決の第一歩を踏み出していたことでしょう。私は、フラッグ姉妹と同じような虚無感を持つひとりの男性を診た時のことを覚えています。この男性はどのような手を打つても、自分の結婚生活上の問題を解決することはできないと信じきっていました。たとえ彼が虚無感を心から感じていたのだとしても、そうした感情は彼自身の置かれている状況から必然的に生じてきたものではなく、妻の非を訴える手段として彼自身で生み出していたものでした。それ自体彼にとって、現状を打開できないまま、状況に屈している「証拠」なのです。

このような気持ちを抱くことによって、彼は妻の「過つた行動」に対して仕返しをし



ていたのです。

ではそのような気持ちに対処するにはどのようなことが考えられるでしょうか。フラッグ姉妹のように、自分の中からそのような気持ちを捨て去り、代わりに許し、愛、思いやりといったキリストのような態度を身につけることができます。虚無感を感じながら同時に許しの精神を持つことはできません。自分の無力感を訴え続けるか、心を主に向けて問題解決に乗り出すか、このいずれかしかないのです。

他の人に対する私たちの悪感情が、その人の態度にも増して問題の本質を成しているのです。他の人の行動によって、思いやりの気持ちや許しの精神が私たちから失われるのではなく、私たち自身で許そうとする自分の心を閉ざしてしまうのです。個人的な平安を得るには、まず怒りの気持ちを悔い改めることが必要です。

教義と聖約64章10節の意味を考えてみてください。「主なるわれは、その赦さんと欲する者を赦す。されど汝らにはすべての人を赦すことを求めらる。」伴侶を許そうとする態度こそ、大切な第一歩と言えます。一番大切なふたつの戒めに対する信仰を行使することにより、私たちはそこから祝福を受けます。すなわち主を真心から愛することによって、私たちの置かれている状況に対して別の見方をすることができます。また自分の夫または妻を自分自身のように愛す

ることで、伴侶をもっと思いやりの気持ちで見られるようになり、もはや絶望感を味わわないで済みます。そうすることで福音を拒む道ではなく、福音の道を歩むようになるのです。

私たちの情緒面の重荷は、自分が無力ではないことを自覚する時に軽減されます。これは、単なる机上論的な信仰ではなく、人々の心や生活の中で力を発揮する信仰と言えます。福音のもたらす賜のひとつに、神は、チャレンジに伴う悲しみを知り、私たちに関心を寄せている御方であるという信仰が挙げられます。このように、福音の肝心な部分に心を向ける時に私たちは確信を得、今までの無力感を捨て去ることができるようになります。たとえそのような気持ちが残っているとしても、以前に感じていたような絶望感とはまったく違った異質の感情となります。

「そうは言っても私たちが被害者であるという事実は変わらないと思います。はたして私たちの伴侶の行ないが変わって、私たちは今までとは違った感情を持つことができるのでしょうか」と言う人がいるかもしれません。

福音は私たちに次のように教えています。すなわち私たちは「何事も自分の心のままに行いほかから強いられることはない。……およそ人間のためになるものは何でも与えられる。」(IIニーフアイ2：26—27) 言葉を変え

## 自分の夫または妻を自分自身のように愛することで、 伴侶をもっと思いやりの気持ちで見られるようになり、…… 福音の道を歩むようになるのです。

て言うならば、私たちの伴侶がどんな態度をとりどんな間違いをしようが、それらは私たちが正しいと思うところから従って生活するのを差し止める力はないということです。

もちろん、それらに対処していくのに魔法のような方法はありません。しかし、もし夫が妻を思いやりの気持ちで見ると、つまり妻の「間違い」に慈悲の気持ちをもって接してあげるならどうでしょう。妻の考え、妻の悩みを理解してあげられるのではないのでしょうか。妻が自己を正当化するためにとっている態度を分かってあげられるのではないのでしょうか。またどうしてお互いの問題を協力して克服できるか考え、将来に望みを託することはできないのでしょうか。福音からみれば、それらはすべて可能です。

このような新たな態度で接する時に、私たちは「心のままに」より良い夫婦関係を築いていくことができるのです。自分が犠牲者であると言いつ張るのではなく、お互いに「偽りのない愛」(Ⅱコリント 6 : 6 参照)を注ぐために、説得力があり、優しく、謙遜で、親切な人になる機会を見つけます。主をご覧になるような見方で、伴侶を見るのです。つまり自分自身、夫、妻、結婚に対して、福音に添った生活から生まれる新たな見方をします。そして人を責め、腹を立て、絶望する代わりに、思いやりを持つのです。

このような心の変化は、ほんの始まりに

過ぎません。それは夫婦間の問題を一夜にして変えてしまうものではないかもしれませんが。しかし、お互いに思いやりをもって接することにより、極めて効果的に問題解決への扉を開くことができるのです。確かに、偽りのない愛や思いやりのある態度から力と影響力が生まれてきます。こうして私たちは結婚生活に良い影響をもたらすことができるようになるのです。

もちろん、伴侶が態度を改めようとせず、そのために私たちが望むような結婚生活の一致が得られない場合もあります。たとえそのようなことがあっても、私たちはやはり腹立たしさや無力感を感じることなく、人生に意義と豊かな報いを見いだすことができます。私たちは無力でもなければ、境遇の犠牲者でもないからです。

このような状況の中では、一方が思いやりある生き方を始めると、相手の「問題」の多くが消え失せてしまうことがしばしばあります。私たちが恨みや敵意を持ち続けている時には、相手にある問題というのは、実は自分自身のそうした気持ちを正当化するためにこちらで作りに出していることが多いのです。自分自身の思いやりのなさを悔い改めると、こうした恨みや敵意は消え、愛する伴侶を新たな光の中で見られるようになります。そして、私たちは相手に望んでいたような思いやりある伴侶に自分自身になれるのです。そうして私たちは相手の生

救い主の贖いを受け入れて自分の心を変えることは、夫婦関係や家族関係の改善を含めいかなる関係改善にとっても欠かせないものです。



活に祝福をもたらす始めるのです。

ヨハネは次のように言っています。「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである。世の富を持っているながら、兄弟（夫妻、子供）が困っているのを見て、あわれみの心を閉じる者には、どうして神の愛が、彼のうちにあるのか。子たちよ。わたしたちは言葉や口先だけで愛するのではなく、行いと真実とをもって愛し合おうではないか。」（Iヨハネ3：16-18）

福音は、結婚生活における問題解決の鍵です。救い主の贖いを受け入れて自分の心を変えることは、夫婦関係や家族関係の改善を含めいかなる関係改善にとっても欠かせないものです。他の人々がしようとすることを私たちが決めることはできません。しかし許しや愛、思いやりの精神を携えたキリストの福音が私たちには与えられています。福音と私たちの自由意志によって、私たちは自分の行なおうとすることを自分で決めることができるし、結局は自分のまいた思いを刈り取ることになるのです。ですから、私たちは自分で恨みや悪感情に土台をずえることも、あるいはまた家庭に平安と調和をもたらすために思いやりある生活のたねをまくこともできるのです。

## 話し合いのために

「思いやりある伴侶になる」の記事を読んでから、以下の質問をひとりで考えてみるか、夫婦で話し合ってみましょう。

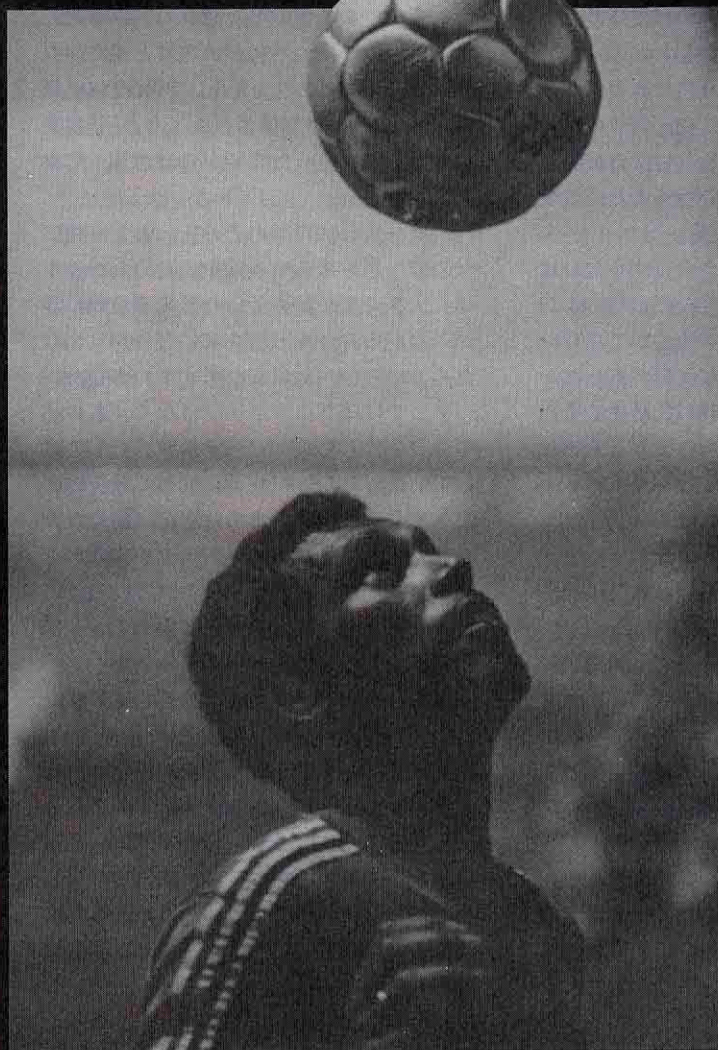
1. 私の結婚生活における特別な問題に対して福音はどのようにその解決策となり得るだろうか。
2. 自分は伴侶に対して常に「感情に左右されない心」の持ち主だろうか。お互いが自分の行ないに責任を持つ時に、結婚生活はどのように改善されるだろうか。
3. 筆者は、私たちの抱えている感情が責任を回避させることになると言っている。そのような感情はどうしたら取り除けるだろうか。
4. 「思いやりある」結婚生活とはどういうものだろうか。私たちが「へりくだる心と悔いる精神」を持つなら、お互いにどのような接し方になるだろうか。



# エロール・ベネット



ミカエル・オターソン



タヒチサッカー界のスターが示した勇氣



「**気**でも狂ったのか。」末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になりたいという息子エロールの言葉に、父親は激怒しました。「正気の沙汰とも思えん。自分が築きあげてきたものを全部捨てることになるんだぞ。全部だ。自分のしてるのがどういふことか分かっているのか。」

息子の言い分など聞く耳持たぬとばかり、彼は言いました。「どうしても言うのなら、もうお前の顔など見たくもない。自分の荷物をまとめてこの家を出て行くんだ。二度と敷居はまたがらん覚悟でな。」

もちろん、父親とのこういうやりとりはこれが初めてではありませんでした。エロールがバプテスマを受ける決心ができないでいたのは、父親の猛烈な反対があったからなのです。しかし、父親が反対するその陰には、耳慣れない宗教への単なる反感以上のものがありました。エロール・ベネットがこの教会の会員になれば、タヒチサッカー界トップスターとしての輝かしい生活に終止符を打つという結果になるのは火を見るよりも明らかでした。

南太平洋諸島のサッカー熱には、南アメリカやヨーロッパの国々のそれに一脈通ずるところがあります。タヒチでは、サッカーはほかのどんなスポーツよりも多くのファンがいて、そのファンたちは寄ると触るとサッカーの話ばかりしています。ですから、サッカーで優勝ともなれば、まさしく全タヒチの英雄ということになります。エロール・ベネットは27歳の時すでに、タヒチ第1リーグの首位チームのキャプテン

として、その栄誉を勝ち取っていました。エロールの名を知らぬ者はなく、どう見ても、彼のトップスターとしての座は当然揺らぎそうにありませんでした。175センチのやせた体つきからは、彼がそのような優れた選手であるなどとは思いつきません。また、笑みを絶やさぬその表情と柔らかな物腰は、全段抜きの大見出しで書かれる「怪物ベネット」「情無用のベネット」「得点王ベネット」といった表現からは想像もできません。

エロールは1977年のその夜、妻と一緒に父の家へ車を走らせる途中、自分たちの生活を大きく変え始めていた出来事を頭に浮かべながら、一体それを父にどう切り出したらよいのか、あれこれ考えていました。

タヒチにはプロスポーツはなく、エロールも日中は首都のパペーテで警官として働いていました。エロールに初めて教会のことを紹介したのは、市の財務部に働くひとりの友人でした。ベネット夫妻を家庭の夕べに招いたリシス・テロアテアというその友人は、当時パペーテ・タヒチステークス部第3ワード部の監督をしていました。

ベネット夫妻は楽しくひと時を過ごし、「幸福の探求」という映画に強く心を動かされました。それから何度か招待されることがあり、エロールはますます教会への関心を募らせていきました。エロールは後にこう言っています。「監督は福音の原則をととも分かりやすく教えてくれました。そして私も妻もバプテスマを受けなければと強く思いました。」



この教会に対して偏狭な考えをする人はいなかったものの、エロールを擁してリーグのトップの座にいたセントラル・クラブというチームにとって、エロールのその決意は、まったく寝耳に水のことでした。南太平洋諸島では大体そうなのですが、タヒチでもサッカーの試合はすべて日曜日に行なわれていました。セントラル・クラブの役員たちも、モルモンは日曜日にはスポーツでなく、何かほかのことをしているということは知っていました。前途有望な若い選手がこの教会へ入ってしまうと、日曜日の試合に欠場するというケースは、このチームで前にもあったことなのです。エロール・ベネットの決意は、間違いなくサッカー選手としての生活の終わりを意味していました。

エロールを初めとする末日聖徒になった選手たちの日曜日に対する態度は、筋の通ったものでした。エロールはすでに、バプテスマを受けたら日曜日の試合には出ないと宣言していました。たとえ好きなサッカーといえども、教会に優先させることはできませんでした。セントラル・クラブの代表であると共に、<sup>Los Angeles</sup> 蹴球連盟会長を務め、タヒチスポーツ界で大きな影響力を持つナポレオン・スピッツ氏が、現地区代表、当時バベテステーキ部長の任にあったピクター・D・ケイブに電話をし、エロールが日曜日に試合ができるよう、何とか特別に許可することはできないだろうかと頼み込みました。事は単にサッカーの試合だけの問題ではなく、タヒチ全体に影響を与える問題だ

ったのです。

ステーキ部長は丁寧に、要を得た返事をしました。「それはエロール自身にお尋ねになるべき問題だと思います。彼の考えを聞いてみて下さい。彼はバプテスマを受けると決めています。自分でどう思ってるか、スピッツさんにお話すると思いますが。」

しかしエロールにとって、この種の問題は、心から愛し尊敬していた父、サッカー選手としての自分の実績を本当に誇りにしていてくれた父の意に背かなければならないことに比べれば、そう困難なことではありませんでした。

当時のことを語るベネット兄弟の言葉を聞くと、父親の理解を得られないために随分と心を痛めていたことが分かります。かつてはどんな時にも心が通い合っていた父なのに、この時ばかりは決して心を開いてくれませんでした。「お前は私との間に壁を作ってしまった。これ以上お前に言うことは何もない。」そして、やがて生まれてくることになっていたエロールの3番目の子供の顔も、見たいと思わないとまで言ったのです。

その晩、エロール夫妻は涙ながらに、父親の家を後にしました。心は悲しみに張り裂けそうでしたが、それでも福音を拒むことはどうしてもできませんでした。こうしてふたりには、たとえどのような問題にぶつかっても決してひるまないだけの強い信仰が求められることとなったのです。

エロールはその時まで教会員にはなっていませんでしたが、まず友人でもあるテロ



ったら、わしの方から行くつもりでいたんだ。」

そしてこう続けました。「お前は自分の事で多くの人をがっかりさせることは知っていると。日曜の試合に出ないということは、サッカー選手としてはやっていけない。ナポレオン・スピッツも、お前ひとりの都合を考えてリーグ全体のスケジュールを変えたりはしないで。でも、これはお前が自分で決めたことだ。このことはもう二度と口に出さなくて。わしからの頼みはそれだけだ。もう済んだことだ。」

今でこそふたりの関係は前と同じように親密なものになっていますが、精神的なしこりはバプテスマの時まで続きました。エロールはこう言っています。「あの日のことは今でも覚えています。私たちはその時まで多くの苦しみにぶつかってきていましたが、何をなすべきかは知っていました。それでも私は、すべては良し、その道を進むべしという、最終的な確認としるしを主御自身から頂きたいと思いました。」

私は家の近くにある山に登り、ひそかに祈りを捧げ、主に自分の思いを話しました。そして、これから進もうとしている道は正しいものであるかどうか、その確証が与えられるように祈り求めました。家へ帰る途中、山の中腹でもう一度、同じ祈りを捧げました。

家に近い所まで来ると、車が1台止まっていた。それはガブリエル・バイアヌイという、10年近くの間、教会にはほんの時たましか顔を見せることのなかった教

員でした。ガブリエルは市場に行った時、エロール・ベネットは結局モルモン教会へは入らないと決めたそうだとだれかが言うのを聞いて、まっすぐ私の家へ来たのです。」

エロールは、神はバイアヌイ兄弟を通して、自分が求めていた答えを与えようと思われているのだと思い、すぐに聞きました。

「ガブリエル、私はきょうバプテスマを受けるべきだろうか。」すると何のためらいもない答えが返ってきました。「エロール、どんなことがあってもバプテスマを受けるべきだ。教会から離れちゃだめだ。」

エロールは彼の助言に感謝して、こう言っています。「それこそ本当に私が求めていたものでした。そのわずかな言葉が、私に欠けていた勇気を与えてくれました。」

バプテスマ会は予定通り進められました。会が終わってから、エロールはしばらく考えました。チームの者からは祝いの言葉もなければ、非難の電話もありませんでした。そして、静かに夜が更けていく頃、彼は決心しました。どっちつかずの態度で苦しんでいるのは良くないことであり、日曜日に試合をしないとすれば、練習をしても何の意味もなかったのです。エロールは次の日スピッツ氏と話し、自分のポジションは他の有望な選手に譲り渡し、引退しようと思いました。

しかし、スピッツ氏の言葉は彼を驚かせました。「しばらく保留ということにして欲しい。今週末に連盟の役員会がある。それまで待つて欲しい。」

数日後、その会のことを聞かされたエロ

ールは自分の耳を疑いました。スピッツ氏は席上、他の役員たちに、セントラル・クラブは日曜日には試合をしないことに決定したと通知し、日曜日の試合は選手たちが家族と一緒に過ごす妨げとなっており、容認できない慣行である、他のチームがどうするかに関係なく、セントラルは日曜日の試合には出場しないと話したのです。

それからその件について投票が行なわれ、以後第一リーグは全試合を平日の夜間に行なうという、満場一致の結論が出たのです。

タヒチの某日刊紙のスポーツ記者ミカエル・フェランド氏はこの会に他のクラブの代表として出席していましたが、その時のことを現在もよく覚えています。彼は笑顔をみせながらこう言っています。「もちろん、試合日程変更の要請の真意がどこにあるのか、出席者は皆知っていました。スピッツさんはセントラルの代表として発言していました。選手とその家族の生活に及ぼす影響とか、彼はなぜそのように変更すべきなのかもっともな理由を幾つか挙げました。でもそれがすべてエロール・ベネットのモルモン教会加入に端を発していたことは、出席者全員に周知の事実だと思っています。」一般の人々の反応は様々でしたが、選手たちはその新しい申し合わせを歓迎したようでした。フェランド氏は言います。

「長年続けてきたことを変更するのは大変なことです。ファンの人たちはそれまで何年もの間、日曜日にはサッカーの観戦をしていたのです。それが突然、平日の夜に変わるというのですからね。スポーツ記者の

中には疑問視する者もいましたが、この変更に対して批判する者はだれもいなくなりました。結局、エロール・ベネットが絶対的人気を博していたということです。彼はタヒチの英雄です。その英雄をわざわざ批難しようという記者はいませんよ。」

エロール・ベネットがバプテスマを受けた1977年以来、タヒチ第1リーグの12チームは平日に試合を行なってきました。これはすっかり定着し、もしエロールが現役を引退することになっても、変更になるようなことはなさそうです。フェランド氏はタヒチで最も大きいカトリック系私立大学の役員秘書をしていますが、こうも言っています。

「私自身もこれは良いことだと思います。日曜日をより神聖な時にする上で役立つなら、とても素晴らしいことですよ。」

サッカーファンが日曜日に、こぞって教会に来るようになったという話こそ耳にしますが、エロール・ベネットのバプテスマをきっかけにしたこの変更は、安息日を聖くするという主張の正しさを示す以外に、タヒチサッカー界そのものに良い影響を及ぼしたようです。その影響をつぶさに観察してきたスピッツ氏は自信をもって言います。

「選手たちにとって、平日に試合をする方が良いのは言うまでもありません。彼らも日曜日には家族と一緒に過ごす方が良いと思っています。良く休めるようになったようです。練習も試合も内容が良くなっています。最初の内はファンの人も戸惑った





かも知れませんが、今では、日曜日に自分の家族と過ごす時間を大切に考えているはずですよ。結局、皆のためになったのです。」

日曜日の試合には出ないとエロールが決心してから6年たちますが、この間彼が出場しなかった試合は、タヒチで行なわれた2試合だけです。どちらも1977年の試合でした。最初の試合は、バプテスマを受けた翌日、すなわち、あの歴史的な役員会で試合日程の変更が決定される以前に行なわれた試合です。2番日は、全タヒチのハマチームが参加するオープン戦、タヒチ・カップの優勝決定戦でした。初めての年に、短期間の予告で、決勝戦の日程を変更するのはどうしても無理だったとスピッツ氏は言っています。しかし翌年以降、タヒチ・カップの試合日程から、日曜日は外されるようになりました。それも元をただせば、エロール・ベネットに端を発していたのです。

福音の原則に対するエロール・ベネットの姿勢は、もし選手生活の終わりという形で結論が出ていたとしても、賞賛するべきものだったでしょう。しかし、それから後も、彼は次から次と信仰の試しを受けることになったのです。そして再び、スピッツ氏があらゆる点で、その重要な役割を果たすべき時がやってきました。

太平洋上に散在するフランス領ポリネシア諸島のひとつ、タヒチ島は人口15万、フランス自治領として、フランス本国の議会にも独自に選出した議員を送り込んでいます。ただ、あくまでも自治領で、独立国ではないために、タヒチのサッカーチームは

ワールド・カップやオリンピックに出場することはできません。それでも、4年に一度開かれる南太平洋競技会への参加資格は有しています。

この競技会が1979年、フィジーのスパで開催された時、エロールの安息日に対する不動の姿勢はまたしても驚くべき結果を生みました。

競技会の前にフィジーで行なわれた準備協議会の中で、スピッツ氏は日曜日の試合の問題が再浮上してくると思いました。案の定、フィジー側はサッカーの決勝戦を日曜日に組み入れてきました。スピッツ氏を代表とするタヒチ選手団がスパに到着した時点でも、その問題はまだ決論が出ていませんでした。実のところ日曜日の競技に関する問題は、決してこの大会が初めてということではなかったのです。トンガやサモアも前々から宗教上の理由を挙げて反対していたのですが、何としてでも変更しようというところまではいってなかったのです。しかし、1979年のこの大会の時は、かなり情勢が変わってきていました。

スピッツ氏はかなりの準備をしていました。そして、実施の点であいまいにされていた南太平洋競技会憲章の条項を取り上げ、日曜日の競技を禁止する条項がある以上それに従うべきだと主張しました。

彼はこう言っています。「サッカーの試合は日曜日には行なわれないことになりました。エロールの欠場という事態はどうしても避けたかったのです。彼自身も日曜日の出場ということはまったく考えていません



でしたから、取るべき道はそれしかなかったわけですね。それともうひとつ、バスケットボールの試合も日曜日にはしないことになりました。タヒチのバスケット選手団の中にモルモンが5人いたからですよ。」そこまで言うと、彼は表情をくずしてこう言いました。「あなた方モルモンが、南太平洋のスポーツ界に抜本的なメスを入れたのですよ。」

何カ月もの折衝の後、ついに1979年度の大会が開催されました。末日聖徒のキャプテンに率いられたタヒチのサッカーチームは、日曜日から月曜日に変更になった準々決勝でニュー・ヘブリデス（現在は独立して、バヌアツの国名）を破り、続く準決勝でもニュー・カレドニアを下し、決勝戦ではフィジーと争って、ついに勝利を収めました。

いかに技量が優れているとはいえ、周囲の人々にそれほどまでさせるとは、エロール・ベネットという人物はよほど頑固で、独善的なのではないかと考える人がいるかも知れません。しかし、彼の態度にはそのようなところはおそらくも見えません。こちらの質問に対しても、彼は静かな声で、はにかむような表情をしながら答えます。彼は福音の原則に対しては、確固とした決意を持ち、まじめな考え方をする人ですが、その子供のような笑顔を見ていると、とてもそんな風には見えません。彼がナポレオン・スピッツ氏のような決断力のある指導者に愛され、チームメイトの尊敬を集めているのは、このような性格によるのかも知

りません。

安息日を聖く過ごしたいという彼の思いは心の底からのものです。「たとえ大切な試合でも日曜日には出場しません。主の日にサッカーボールをキックしたいとは思いませんから。」この言葉には、彼の決意のほどがよく表われています。そして、実際にそういう場合も何度かあったのです。彼は外国チームとの重要な試合でも、それが安息日の場合は出場しませんでした。そういう試合が行なわれたのは、ほとんどタヒチ以外の地においてでした。日程の決定権を持つ主催国が、タヒチ選手団の便宜を図ってくれるということまではいかないのです。

そういう中で、今でも語り草となっていることが1978年にありました。フランスとその海外領の全サッカーチームのあこがれ、フランス・カップ競技会の時のことでした。タヒチ蹴球連盟はフランス蹴球連盟に加盟しており、タヒチチームもこれに参加し、覇を競い合います。

かなり以前からの定めで、南太平洋地域ではタヒチとニュー・カレドニアのそれぞれの上位2チーム、計4チームが代表権を得るために争い、ここで優勝したチームが年に一度フランスで開かれるフランス・カップ競技会に出場し、フランスのプロチームと対戦します。南太平洋地区のこの予選は1年交替で、タヒチかニュー・カレドニアかのどちらかで開かれることになっています。

1978年、エロールが属するセントラル・



クラブは代表権をかけた、この最終予選に出場する資格を得ましたが、開催地はニュー・カレドニアで、決勝戦は日曜日と決まりました。スピッツ氏の説得をもってしても、試合日程を変えることはできなかったのです。前の年に、チームのけん引役として最終予選を通過し、フランス・カップ決勝シリーズに参加した時もそうでしたが、エロールはこの時の試合も欠場しました。チームメイトが午後からの大事な一戦に備えて練習をしていたその日曜日の朝、エロールは教会へ行きました。試合開始の笛が鳴らされた時、セントラルのキャプテンはひとりホテルの自室にこもっていました。

エロールはその日のことを思い出しながら、こう言っています。「あの日のことは忘れられませんね。試合の終了時間が近づいてきた頃、私はセントラルが苦戦しているのではないかと強く思いました。試合のことで主に祈るのが果たして正しいことかどうかと考えましたが、主は私の立場と、それまで正しいことをしようと努力してきたことを御存じだ、という確信がありました。そして最後に、ひざまずいて、セントラルの選手たちが全力を発揮できるよう助けを与えて下さいと祈りました。」

エロールが後で聞かされたところによると、セントラルは1ゴールリードされ続け、ようやく2対2の同点にこぎつけた時は、試合時間は余すところわずか60秒しかありませんでした。そして終了間際、ぎりぎりのところで勝利のゴールを決めたのです。セントラル・クラブにとって、この試合は

いつまでも忘れられない一戦となりました。

1980年、セントラルはフランス・カップの最終予選を再びニュー・カレドニアで戦うことになりました。この時、エロールは初めから辞退するつもりでいました。「試合地はニュー・カレドニアでしたし、決勝戦まで進んだとしても、試合が日曜日になるのが目に見えていたからです。欠場ということになれば印象もよくありません。私のポジションを別の選手に譲っておく方が、関係者の皆さんのためにも良いのではないかと思ったのです。でもスピッツさんはそれを承知しませんでした。ニュー・カレドニア側を説き伏せて、試合日を土曜日に変えてしまったのです。」そしてその決勝戦、エロールが最後のゴールをきめ、4対3でセントラルが優勝したのです。

タヒチにはプロのスポーツチームはなく、国際サッカー界という観点からすれば、取るに足らない存在だと考える人がいるかも知れません。ところが事実は案に相違して、全人口の約25パーセントの人々が、様々な会員制スポーツクラブに入会しています。サッカーが行なわれている南太平洋14の独立国、自治領の中で、タヒチのサッカーは技術、作戦のうまさ、底力など、あらゆる面でトップクラスにあります。そしてタヒチサッカー界繁栄の象徴とも言えるエロール・ベネットは、自分の影響力が、タヒチだけにとどまることなく、広く及んでいくのを目にしてきました。

エロール・ベネットは1979年南太平洋競技会の折、ある新聞記者からインタビュー



を受けた時のことを話してくれました。タヒチチームのキャプテンが安息日の出場を拒否したことに興味を持ったその記者は、インタビューの中でこう聞いてきました。「今生きている人の中で、一番尊敬するのはだれですか。」

「彼は私がだれか有名なスポーツ選手の名前でも挙げると思っていたようです。でも私が挙げた名前は、スペンサー・W・キンボール、80歳を越えられた末日聖徒イエス・キリスト教会の大管長でした。いつか大管長と握手がしたいという望みから始まって、インタビューの残り時間は、ほとんど教会の話だけでした。」

大管長と握手したいという彼の願いは、1981年2月13日、大管長がタヒチ神殿<sup>ドーム</sup>入式のためにタヒチを訪れた時にかなえられました。この時エロールは、鍬を持つ教会幹部たちを介添えする責任を与えられました。

エロール・ベネットは現在33歳、すでに5児の父親ですが、なおタヒチサッカー界のトップの座に君臨しています。パペーテ郊外の彼の家の棚には、光輝く数多くのトロフィーが並んでいます。彼はこの10年以上の間、最優秀選手の地位を守り続けてきました。

エロール・ベネットの勇気は、この地域の人々に、教会に対する良いイメージを与えてきましたが、この影響力について考えると、興味の尽きるころがありません。C・ジェイ・ラーソン伝道部長は機を失することなく、求道者が出席する集会にエロ

ールを招いてきました。最近タヒチの広報ディレクターを解任されたジーン・ティファンは感慨深げにこう語りました。「もちろん、すべての人がこの教会の安息日に対する考え方に同意しているわけではありません。しかし、安息日の過ごし方を見て、モルモンを尊敬しているようですね。今なお聖書の中の原則を忠実に守ろうとしている人々がいるということをたたえる声が随分あります。今タヒチでは、選手たちはもちろん、多くのファンも日曜日にはサッカーの観戦ではなく、家族と一緒に過ごすようになっています。それも元をただせば、ひとりの末日聖徒から始まったことなのです。」

それにしても、まだ大きな疑問が残ります。ナポレオン・スピッツ氏のような優れた人物が、安息日の問題に関して、あれほどまでにエロールをバックアップしたのはどうしてなのでしょう。彼はエロールと同じ宗教的信条を持っていたわけでもなかったのです。スピッツ氏は、大きな影響力を持つ自治領体育委員会の理事、フランス領ポリネシア蹴球連盟の会長を務めると共に、フランス領ポリネシア立法議会第一副議長に選出されたほどの人物です。エロール・ベネットのどのようところが、彼の心を引きつけたのでしょうか。

議事堂の政務室にスピッツ氏を訪ねた時、彼はこう語ってくれました。「それが宗教上の強い確信によるものであることは分かっていました。その点で私は彼を尊敬しました。

彼は単に一サッカー選手というだけには



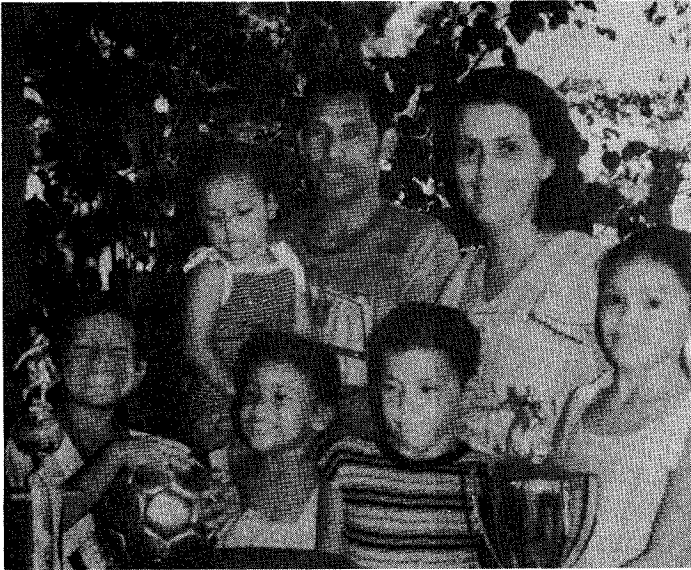
## 重要な試合に勝利を収めたエロール・ベネットと、それを報ずる新聞記事

とどまらない人物です。彼は歴史的に見てもタヒチサッカー界最大のスターだと思います。彼の態度や気質からしても、優れた人物であることは一目瞭然です。モルモンになる以前からそういった優れた特質を持っていましたから、今ではそれはもっと大きなものに伸ばしているでしょうね。選手生活の中で、行ないが悪いと注意されたようなことは一度もありませんでした。」

エロール・ベネットがいつまでサッカーを続けるかは、だれにも分かりません。でも、あと数年はトップスターの座を守り続けることでしょう。

これまで過ごしてきたあわただしい数年の歳月、数々の問題、貫いてきた原則、出会ってきた人々などに思いをはせながら、エロール・ベネットは簡単にこう言いました。「私は本当に祝福されてきました。」





エロール・ベネットと家族

アテア監督に会い、助言を求めました。監督は彼の話聞いてから、バプテスマの問題はさておき、まず父親との関係を元通りにするよう勧めました。それから神権の祝福の原則について話し、神権の権能によって彼に助けを与えることができると説明しました。

その晩エロールは、長年の友人であり、サッカーファンでもあったノエル・タラチから、神権の祝福を初めて受けました。タ

ラチは静かな声で、その問題が早く解決され、厳しいことを言った父親も、エロールが帰っていくなら受け入れてくれると約束しました。

翌日、エロールは再び自動車で父の家へ向かいました。家に近づくと、父が前庭の入口の所に立っているのが見えました。父親は目に涙を浮かべながら言いました。「エロール、きのうの事は許してくれ。きのうは一睡もできなかった。もしお前が来なか

# かけがえのない時

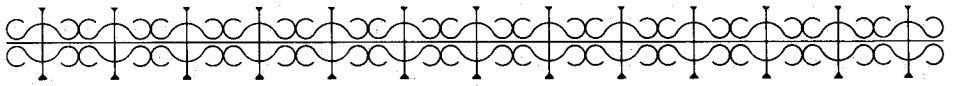
アーデス・G・カップ



「それからはずっと幸せに暮らしましたとき」とは、なつかしいおとぎ話によくある結びの言葉です。カナダのアルバータのカルガリーに住むネドラ・レッド姉妹は、おとぎ話はあくまでおとぎ話であって、現実とはかけ離れたものであることを私たちに気づかせてくれました。「それ

から後、確かに幸せな時はたくさんあったでしょう」と彼女は説明しています。「でも、私たちがもしも死ぬまで何の困難にも遭わないことを期待しているとしたら、その期待は必ずや裏切られることでしょう。」

レッド姉妹はこう言っています。「長い人生には山も谷もあることを忘れてはなりま



せん。かまれることも、ひっかかれることもあります。しかもそれを避けることはできないのです。」

レッド姉妹はそのことを分かりやすく説明するために、彼女が自分の子供のようにかわいがっている子ねこを引き合いに出しました。「私にはニコデムスとルフスという名の2匹のねこがいます。ねこはかんだり、ひっかいたりしますね。でも、それでいて、おとなしくてかわいいものです。もし私たちが人生に希望を託し、良い時ばかりでなく、かみつかれる時やひっかかれる時があることを考えて人生の設計を立て、悪い時もやがては過ぎ去るものだと思うようにすれば、その時はつらい思いをしても、やがて人生は喜ばしいものとなり、落ち込むことも苦悩することもなくなるのではないのでしょうか。」

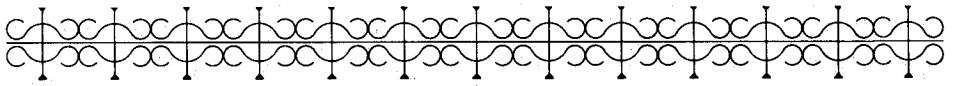
レッド姉妹は、自分が何度かの厳しい試練の中で体験してきたことについてしばらく考えていましたが、やがて、すべてを受け入れたという穏やかな口調でこう話し始めました。「本当に苦しい状態にある時、こんなはずではないと思いました。しかし、それはそうなって当然のことだったのです。私たちには試しや試練の時があります。人生のころあいを見計らって、天父は私たちにひと息入れる転換の時を与えて下さいます。私はそれを『かけがえのない』時と呼んでいます。」

レッド姉妹の考え方はこうです。「神は一週間を7日とし、その一日を特別な日と定められました。それと同じように、つらい日が続いて初めて、これ以上幸福な日はな

いと思うような特別な日が訪れるのです。」

レッド姉妹にこの「かけがえのない」時が訪れたのは、最初の子供が生まれた時のことでした。3カ月もたたない内から試練の時が始まりました。母親と子供の双方がポリオにかかってしまったのです。不安が募る中で、熱心な祈りが捧げられました。夫のフィリップ・レッド兄弟は、現在カナダのセミナリー・インスティテュートのコーディネーターをしていますが、その頃はセミナリー教師としてフルタイムで働くための準備に追われていました。「私たちはこれまで、義しいことを行なおうと一生懸命努力してきました。ですからとにかく主が望まれることを行なおうという気持ちでした。たとえ苦しい時でも主はきっと祝福を与えて下さると信じていました。」

天父は、主の民は試みられなければならないと言っておられます。アブラハムでさえ、ひとり息子を捧げるようにと命じられました。(教義と聖約101:4参照)このようなわけで、忠実なこの夫婦も試しを受けたのです。彼らの祈りは答えられました。ただし部分的でした。レッド姉妹は癒され、何の後遺症も残りませんでした。大切な息子は手足と背中が麻痺してしまったのです。幸福に満ちた家庭のあの輝きは、一瞬のうちに消えてしまいました。人生のこの試しは次第につらい現実となって現われてきました。レッド兄弟姉妹は、特別な治療のために息子を160キロも離れた小児病院に入院させることになりました。それから1年がたちましたが、息子は相変わらず弱弱しく、成長もはかばかしくありませんで



せん。かまれることも、ひっかかれることもあります。しかもそれを避けることはできないのです。」

レッド姉妹はそのことを分かりやすく説明するために、彼女が自分の子供のようにかわいがっている子ねこを引き合いに出しました。「私にはニコデムスとルフスという名の2匹のねこがいます。ねこはかんだり、ひっかいたりしますね。でも、それでいて、おとなしくてかわいいものです。もし私たちが人生に希望を託し、良い時ばかりでなく、かみつかれる時やひっかかれる時があることを考えて人生の設計を立て、悪い時もやがては過ぎ去るものだと思うようにすれば、その時はつらい思いをしても、やがて人生は喜ばしいものとなり、落ち込むことも苦悩することもなくなるのではないのでしょうか。」

レッド姉妹は、自分が何度かの厳しい試練の中で体験してきたことについてしばらく考えていましたが、やがて、すべてを受け入れたという穏やかな口調でこう話し始めました。「本当に苦しい状態にある時、こんなはずではないと思いました。しかし、それはそうなって当然のことだったのです。私たちには試しや試練の時があります。人生のころあいを見計らって、天父は私たちにひと息入れる転換の時を与えて下さいます。私はそれを『かけがえのない』時と呼んでいます。」

レッド姉妹の考え方はこうです。「神は一週間を7日とし、その一日を特別な日と定められました。それと同じように、つらい日が続いて初めて、これ以上幸福な日はな

いと思うような特別な日が訪れるのです。」

レッド姉妹にこの「かけがえのない」時が訪れたのは、最初の子供が生まれた時のことでした。3カ月もたたない内から試練の時が始まりました。母親と子供の双方がポリオにかかってしまったのです。不安が募る中で、熱心な祈りが捧げられました。夫のフィリップ・レッド兄弟は、現在カナダのセミナリー・インスティテュートのコーディネーターをしていますが、その頃はセミナリー教師としてフルタイムで働くための準備に追われていました。「私たちはこれまで、義しいことを行なおうと一生懸命努力してきました。ですからとにかく主が望まれることを行なおうという気持ちでした。たとえ苦しい時でも主はきっと祝福を与えて下さると信じていました。」

天父は、主の民は試みられなければならないと言っておられます。アブラハムでさえ、ひとり息子を捧げるようにと命じられました。(教義と聖約101:4 参照) このようなわけで、忠実なこの夫婦も試しを受けたのです。彼らの祈りは答えられました。ただし部分的でした。レッド姉妹は癒され、何の後遺症も残りませんでした。大切な息子は手足と背中が麻痺してしまっただけです。幸福に満ちた家庭のあの輝きは、一瞬のうちに消えてしまいました。人生のこの試しは次第につらい現実となって現われてきました。レッド兄弟姉妹は、特別な治療のために息子を160キロも離れた小児病院に入院させることになりました。それから1年がたちましたが、息子は相変わらず弱弱しく、成長もはかばかしくありませんで

「悪い時も

やがては過ぎ去るものだと

思うようにすれば、

その時はつらい思いをしても、

やがて人生は喜ばしいものとなり、

落ち込むことも苦悩することも

なくなるのではないのでしょうか。」

のでした。」彼女はそう述懐しました。

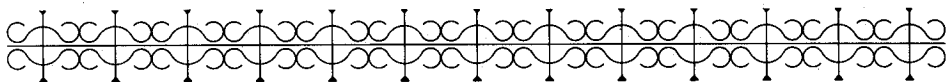
ある晩、不安に耐えきれなくなったこの若い母親は、床を出て別の部屋に行き、天父に祈りました。その時、彼女は子供の頃のある出来事を思い出しました。病気の夫のために祈った心の清い立派な女の人のことでした。その人は、主のみこころなら、自分が夫の病気を負いますから、夫が主のために働けるようにして下さいとお願いしたのです。するとこの姉妹はまったく耳が聞こえなくなり、それは死ぬまで治りませんでした。一方、彼女の夫は奇跡的に癒され、みたまにあふれた指導者、神に仕える人となり、その地域にあって神の王国を立てるために力強い指導者となって働きました。この出来事を思い出しながら、この忠実な母親は天父に、自分が息子の病気を負いますから、息子を元気にして下さいと嘆願したのです。彼女はそれからベッドに戻り、休みました。

息子は入院したままでしたが、うれしいこともありました。もうひとり男の子が生まれ、その後女の子にも恵まれたのです。そのうちに、病気の息子もだんだんと力をつけ、支えがあれば歩けるようになりました。その後、息子は一時退院し、家族そろってクリスマスを迎えることができました。

喜ぶべき確かな理由がある一方で、試練の時が着実に近づいていました。数カ月が過ぎた頃、レッド姉妹は手と足の感覚がなくなってきたのに気づきました。赤ん坊のおむつを替えながら、安全ピンでうっかり親指を刺してしまうことがよくありました。指先の血を見て、レッド姉妹の不安は募る

した。

重苦しい3年の月日が流れ、息子の不安は募るばかりでした。優しく義しい母の思いは、清らかな母性愛と混ざり合い、母親の痛む胸の中で大きく膨れ上がっていききました。「何とか元気になって欲しいと、それだけ願っていました。入院していれば夜優しくベッドに寝かしてあげることもできませんからね。こんなつらいことはない。当時の私にとって、あの子は私の命そのも



ばかりでした。あの恐ろしい<sup>まひ</sup>麻痺が次第に全身に広がっていくのを感じたのです。そんな彼女にとって、小さい赤ん坊の世話や家族の面倒を見ることはとても大変でした。このような状態で何年か過ぎましたが、逆境と祝福の双方を味わうという毎日でした。息子は固定器を付けて、何とか学校へ通うことができるようになりました。この祝福を心からの感謝と喜びをもって受け止めたものの、激しい頭痛と、手足の麻痺に襲われたこの若い3児の母親は助けを求めずにはいられませんでした。家族や友人の援助がありましたが、それでも足りなかったようです。「皆さんいい方で、とても親切でした」と彼女は感謝の気持ちを込めて語っています。「でも、体が思うように動かず、愛する者たちの世話ができないというのは、本当につらいことです。」

専門医のグループの診断の結果、姉妹の体をむしばみ、麻痺させているのは多発性硬化症ではないかということでした。将来のことを考えると目の前が真っ暗でした。

「もうずいぶん昔のことになりました。」そう語る今のレッド姉妹は、健康で美しく、活動的で、見るからに生き生きしており、証が強く、苦しみに打ち勝って清められた心が光を放っています。

彼女は、献身的な夫と共に主のみこころをまず求めようとして、当時セミナーのスーパーバイザーであり、現在教会幹部となっている友人の助言を求めました。その日のことをこう語っています。「主は私が命を捧げることを求めておられるのではないと思うと、その友人は言ってくれました。

それから私に祝福を施し、主は息子に代わる私の捧げ物を受け入れておられるのだと説明してくれました。そして、私の命が取り上げられることがないという約束を与えてくれたのです。でも、私たちの試しの大きさを調整し、それを取り除く時を決めるのは私たちではありません。私たちは信仰の度を試されてからでないと証が得られません。(イテル12:6参照)そして、天父はやがてその時を決めて下さるのです。」

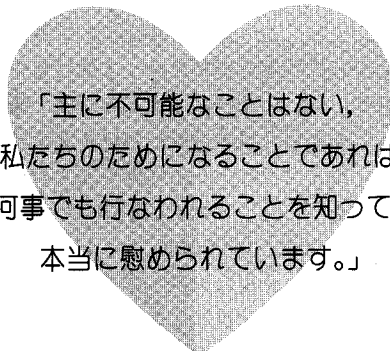
試しが早く取り除かれないものかと願っている時は、主が私たちの忍耐と忠実さの度をはかっておられる時なのです。祝福の後でレッド姉妹の容態は悪化し、10月25日からは寝たきりの状態になりました。食事もひとりではできません。「歯も自分で磨けませんでした」とレッド姉妹は語っています。「優しい夫と共に、人生の目的と死について話しました。私たちは主の求められることは何でも受け入れることができるようにと祈りました。その時、私たちはすべては好都合となるという思いを抱いたのです。」この若い夫婦は互いに力を引き出し合って、試しに耐え、「幼児がその父に従うように、主が負わせたもうすべてのことに喜んで服従」(モーサヤ3:19)することの大切さを見いだしたのです。

12月20日、ネドラ・レッド姉妹はアルバータ州エドモントンにある病院に運ばれました。そこで精密検査を受けました。長く不安な2日間が過ぎた後、彼女の病は多発性硬化症ではなく、頭蓋骨の底部にできていた根の深い、かなり進行した<sup>しんじょう</sup>腫瘍によるものであろうという診断が出されました。

## かけがえのない時

手術は不可能のようでした。衰弱していることもあって手術をするのは、はなはだ危険なことでした。しかし、腫瘍を摘出しなければ2週間しか生きられないという医師の説明でした。この腫瘍がやがて呼吸困難を引き起こし、空気の流れを妨げるようになるのです。事態は絶望的でした。その時ひとりの医師から助言があり、手術を希望するなら、クリスマスが過ぎてからのほうがよいでしょうと言ってくれました。けれどもレッド姉妹は、自分の力の源に目を向けました。教会幹部である友人から受けた祝福です。この若い夫婦は勇気を持って決定を下しました。「手術はクリスマス・イブをお願いします」と彼女は言いました。「天のお父様が祈りに答えて下さろうとしているのです。」彼女はささやくように話を続けました。「日曜日の夜、ステーキ部長をしているいとこが来て、祝福をしてくれました。彼は私に祝福を施している時、本当に力が出ていくのを感じたそうです。」神権の力が再び彼女のために働き始めたのでした。

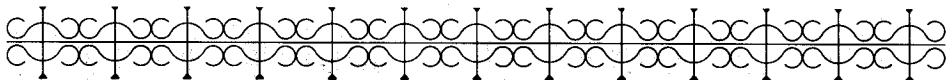
手術が終わってその晩は、家族も友人も寝ずに不安な一夜を過ごしました。やがて夜が明けました。クリスマスの朝です。腫瘍は無事に取り除かれました。病室の中は、時を刻む音だけがカチカチと聞こえていました。手術は終わったものの、彼女の病状がどうなるのか、何とも言えない状態でした。「意識が戻るまでの時間は特別な時間でした」とレッド姉妹は説明しています。生と死の間の薄明りの中から、やがて命の賜がこの忠実な女性に引き戻されたのは、クリスマスの朝のことでした。賜はひとつづ



「主に不可能なことはない、  
私たちのためになることであれば  
何事でも行なわれることを知って、  
本当に慰められています。」

つ彼女の元に戻ってきました。彼女はその一つ一つをじっくりと味わい、かみしめることができたのです。何という貴い宝、かけがえのない賜でしょう！

「私は大丈夫だった。手術に耐えられたのだ、生きているのだ。」最初に彼女はその喜びをじっとかみしめました。「でもあたりは真っ暗、何も聞こえません。声を出そうとしても出ません。私はとっさに思いました。目が見えなくなったのだ、聞くことも、



話すこともできない。だけど私は生きている。生きていることの喜びに圧倒されて、私はまた意識を失ってしまいました。次に気がついた時、見回してみると、あたりにぼんやりと明るさを感じました。まったく見えなくなったわけではないのだ、と私は思いました。なんとなく光を感じることができました。私は祈ろうという気になり、『天のお父様、こうして生きていられ、まだ視力が残っていることを感謝します』と祈りました。暗闇の生活をしなくてもよいのです。私はもう一度感謝しました。その時、夫の顔が目映りました。夫は私に話しかけていました。でも聞こえないのです。」レッド姉妹は語調を強めて語りました。「夫が見えたのです。夫の顔が見えた時の喜びといったら……

私はすぐに夫の言っていることが聞き取れました。耳が聞こえることを感謝しました。話すことができないのだ、と思いましたが、でも、もう十分です。見ることができ、聞くことができるのですから。」

クリスマスの朝、レッド姉妹はこれらの貴い賜が返ってきた喜びと感謝の思いにひたりながら、最後の宝をかみしめる感動を味わうことになりました。「医師が来ました。私は話す努力をしていました。夫に『奥さんは話せますか』と尋ねるのが聞こえました。夫は首をかすかに横に振りました。『やはりそうですか。腫瘍を取り除くためには、声帯をほんの少しですが傷つけざるを得なかったのです。ですから、もしかすると声が出なくなるかもしれないと思っていたの

です』という医師の説明でした。」

今、澄みきったつやのある声で、レッド姉妹はその時の思いを語っています。「話せないだけです。でも、私は聞くことも見ることでもあります。何とも言えぬ喜びと感謝の気持ちが込み上げてきました。その時医師は気管切開手術をした私ののどに手を当て『声を出してみなさい』と言いました。すると声が出たのです。これで話すこともできる、と私は思いました。主が私たちを祝福して下さったことをしみじみと思い、喜びで一杯でした。

これは、クリスマスの朝のことでした。何よりも夫の助けが欲しい時に、夫はずっと私のそばにいてくれました。私は身も心も喜びと感謝で満たされていました。私は夫に、家に帰ってこれからは子供たちのそばにいてあげて下さいと頼みました。本当に素晴らしいクリスマスでした。」

深い信仰と大きな勇気によって、試練と苦難の時を切り抜けたレッド兄弟姉妹は、喜びの気持ちをこう述べています。「主には不可能なことはない、私たちのためになることであれば何事でも行なわれることを知って、本当に慰められています。」この経験から彼らは次のことを学びました。「主は、永遠の栄えある事柄だけでなく、あらゆることを心に留めておられます。それは、ちょうど『メサイヤ』の中のハレルヤコーラスと静かなバックグラウンドミュージックのようなものです。主はそのどちらの中にもおられ、すべての人の永遠の幸福をたえず心にかけておられるのです。」



# 主イエス・キリスト

**大**事件が起こった時、人間は3つのタイプに分かれます。第1に、事件が起こっていることに気づかない人。2番目は、事件が起こっていることには気づいているが、事件の真相は分からない人。そして3番目は、事件の内情にまで詳しい人、この3つのタイプです。

人はどのようにして事を起こすのでしょうか。ひとりの青年として、父親あるいは母親として、教会の指導者として、どうすれば感化を及ぼすことができるでしょうか。どうすれば学業の成績を上げ、人生で成功することができるでしょうか。そのためには物事を主の方法ですることではないかと思えます。私たちは、主イエス・キリストを信じることによって事を起こすことができるのです。

皆さんの中には、学業について心を煩わせている人や、思うように成績が上がらないという人がいるでしょう。主を信じることによって道が開けないでしょうか。また就職のことが心配な人もいるでしょう。結婚を心配している人もいるでしょう。自分は結婚するのだろうか、するとすればだれと、いつするのだろうか、と。また子供の養育、病気、死、性格上の問題、個人としての進歩成長が心配な人もいるでしょう。こういったことも、主への信仰を持つこと



ハリー・アンダーソン画

# を信じる信仰

七十人第一定員会会員 ジーン・R・クック

によって、道が見えてくるのではないでしょう。

こういった難問に自分ひとりの力で答えを出そうとし、うまくいくものと信じ込みますが結局間違った選択をしてしまう人もいます。主がこのような人々に対して、「いつまでむだな抵抗をするのか、いつまであなた自身の道を行くのか」と言われたのも、もっともなことです。

忠実な末日聖徒であれば、何事も好都合とするには（教義と聖約90：24参照）、作用されるのではなく作用するには（IIニーフアイ2：13—14, 16, 26—27参照）、そして自分はもちろん他の人々や状況を正しく治めるには（IIIニーフアイ7：17—18参照）、どのように信仰を用いればよいか知りたいと思うでしょう。また自分自身について具体的な主のみこころを知り、そしてそのみこころに従うべく信仰をもって自己を訓練したいと思うでしょう。

信仰とは何でしょうか。予言者ジョセフ・スミスは次のように説いています。

「信仰の原則によらなければ、諸々の世界は決して創造されなかったであろうし、人もちりから造られなかったであろう。エホバが働いておられるのはその原則による。その原則によって、現世と永遠の世の事物すべてを管理しておられるのである。この

原則または属性（なぜなら信仰は、神の属性であるからである）を神から取り去るならば、神は存在しなくなるであろう。……

したがって、信仰は第一の大切な支配の原則であり、万物を治める力、支配権、権能を有する。信仰によって万物は神のみこころのままに存在し、支えられ、変えられ、維持されるのである。信仰がなければ力はない。力がなければ創造も存在もまったく



それはまことに善い種子、善い言葉に違はなく、私の心を大きく開き、私の理解力を増し、私はようやく好い味を感じると。

ごらん、このようにしてあなたたちの信仰と言うものが増すではないか。

（アルマ32：28—29）

あり得ないのである。)(*Lectures on Faith*, No. 1, pp. 9-10)

信仰について私が理解している最も簡潔な定義は、「信仰は力である」ということです。人生の様々なチャレンジを解決するためにどのように信仰を行使すればよいでしょうか。また、自分自身や他の人々が祝福にあずかれるようにするために、その力を用いることをどのようにして学ばばよいでしょうか。そこで6つの具体的な提案をしたいと思います。

## 1. 信じる

私は、この簡潔ではあるが神聖なニーファイの言葉が大好きです。「私ニーファイはまだ大そう若かったが、……心から主に向って祈った。ところがごらん、主は真実まことに私を訪れたまい私の心を和げたもうたから、私は父がこれまでに語った言葉をみな信じた。それで私は兄たちのように父に対して逆らわなかったのである。)(*I ニーファイ 2 : 16*)

あなたは信じることができますか。これという確実な証拠がなくても、信仰をもって親や指導者の言葉に従うことができますか。信じようとしないうと信仰がなくなることを、心に留めておいて下さい。信じようとしなかったレーマンとレミュエルの態度を見ると、このことがよく分かります。

「レーマンは私と私の父に腹を立て、レミュエルもレーマンの言うことを聞いたから一しょに腹を立てた。)(*I ニーファイ 3 : 28*)

中にはレミュエルのように神の声ではない声に惑わされて、その声に従う人がいます。そのような人は価値のない主義主張や人を信じ、偽りの原則を受け入れているの

です。ニーファイは後に、人が神から最もよく導きを受ける方法を兄弟たちに教えています。

「それは静な細い声で話したもうたが、あなたたちはなんらの感じもなかったのでその御声を感じることができなかった。)(*I ニーファイ 17 : 45*)

信仰を行ないに移す前に、あなたにはどれだけの裏付けが必要でしょうか。あなたは、他の人の靈感を受けた言葉を信じることができるでしょうか。それとも自分の経験しか信じることができないでしょうか。信仰は物的証拠に基づくものではありません。まず自分の信仰を行使しなければなりません。そうすればしるしが与えられるでしょう。信じて行なう時に霊的なしるしが得られるのです。

## 2. 決意する

完全に決意し、決意に従いましょう。多くの人にとって、誠実な決意をすることは決意に従っていくことよりも難しいようです。そのような人々は行き当たりばったりの人生を送っているのかもしれませんが。彼らは様々な教えの風や世の中の風潮にもて遊ばれているようです。人生から得る漠然とした考えしかないまま、道に迷っているのです。

一方、自分の望むことを決め、それを達成すると決意し、そしてそれが実現するまで正しく信仰を行使していく人々がいます。このような人は、自分が義しく望んでいることを手にするまで、霊的に何が優先するかを心に刻んでいます。この点においてニーファイのきわめて神聖な決意と決意に従っていく姿勢には、大いに心を動かされません。ニーファイはこう言っています。

「主が生きていまし私が生きているように確に、私たちは主の命じたもうたことを果すまでは荒野にいる父のところへ帰らない。」(Iニーフアイ3:15)

主を信じる信仰は、よく私を支え励ましてくれます。人は自己訓練をし、犠牲を払うことによって事を起こすことができます。皆さんの言葉を神と人の前に清いものとして下さい。心から決意して下さい。そうすれば主があなたのために物事をいろいろと教えて下さることが分かるでしょう。

私が伝道部長をしていた時に知ったひとりの青年についてお話したいと思います。その青年は信仰に満ちた、ウルグアイ人の宣教師でした。私が着任した時、彼は伝道に出て3、4カ月ほどでしたが、彼が伝道する所ではどこでも人々がバプテスマを受けていました。私は、初めの内、先輩宣教師の力によるものと思っていました。そのような成果を上げるには、彼は伝道に出てまだ日も浅く、経験がなさすぎるように思えたからです。ところが私の思い違いでした。

彼は事を起こす方法を知っていたのです。彼は先輩宣教師として、また監督長老として召されました。私は、伝道しても成果がなく、伝道しにくいと評判だった町に彼を派遣しました。宣教師たちは1年ほどの間、ひとりの人にもバプテスマを施すことができず、会員たちは落胆していました。支部には10～12人の人しか集っていませんでした。私は彼にただ転任のことだけを知らせ、ほかには何も言いませんでした。3週間後、彼と彼の同僚は最初のバプテスマを施しました。彼はその町で2カ月半ほど伝道しました。そして、彼の支部で働く全員の宣教師がバプテスマを施すようになりました。

バプテスマを施すことのできる宣教師がいることは素晴らしいことですが、その宣教師がバプテスマを行なう方法を他の人々に教えることができるならば、彼の指導によって多くの人々の生活に祝福がもたらされることになります。

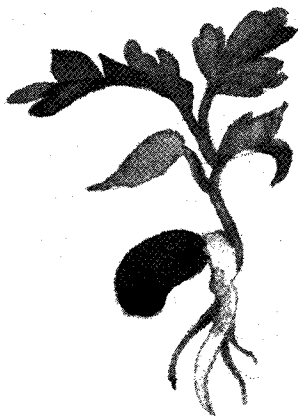
この宣教師が週間報告書に長々と報告文を書いてきたことは一度もありません。いつも「伝道部長、私は伝道部長を心から尊敬し、愛しています。万事うまくいきます」とか、「伝道部長、主は私たちをととも祝福して下さい。私は伝道が好きです」としか書いてきませんでした。

彼は後に巡回宣教師に召され、伝道の非常に難しい町が幾つかあるゾーンの北部地域全体を管理すべく送られました。宣教師たちに彼がしていることをするように教えることが、彼の新たな課題でした。彼はそこで2、3カ月働き、多くのバプテスマを施しました。彼は実際にその地域全体の宣教師ばかりか会員の指導者の姿勢をも変えたのです。宣教師と会員が協力して霊的な奇跡を行なったのでした。

その後、私の精神的な苦しみが始まりました。絶えず彼のことが頭にありました。私は彼をパラグアイに派遣すべきであると強く感じていました。当時、パラグアイにおける伝道の成果ははかばかしくなく、国全体で月平均20～25のバプテスマしかない状態だったのです。私はその問題に取り組みながらひとり考えました。「彼は確かに今は力を示しているが、あのような状態の中に彼を置いたら、これまでの多くの宣教師と同じように落胆するのではないだろうか。自分の信仰を持ちこたえるために、苦しい思いをするのではないだろうか」と。私は彼を行かせるべきであるという確信を得る

ために、自分の信仰と戦わなければなりませんでしたが、結局みたまのささやきに従うことにしました。

私は彼に電報を打ち、巡回宣教師としてパラグアイのアスンシオンに移るように、移動は明日とすると告げました。彼はモニタービデオに来て、私に会いに来さえしませんでした。遠慮深い彼は、「伝道部長」に会うことをいつも少しきまり悪く思ってい



**さ** てあなたたちがこのように知るのには完全な知識であるか。その通り、ただこのことのみに関しては完全であるから、このことに関するあなたたちの信仰と言うものは眠っている。これはあなたたちがすでに知識があるからである。神の言葉がすでにあなたたちの心を大きく開き、種子のように芽を吹き出したのであるから、あなたたちは自分の理解力が増し、自分の頭が開けてくることを感じて知っている。(アルマ32:34)

たのです。

彼は伝道本部を立ち去る時に、1通の手紙を残していきました。それは、私から受け取った初めての手紙で、このように書いてありました。「クック伝道部長、きょうパラグアイへ行くようにという電報を受け取りました。伝道部長は次のようなことを御存じのことと思います。(1)パラグアイではバプテスマを行なうことができない。少なくとも10~15人の長老たちからパラグアイでの経験を聞きました。(2)会員が少しも助けてくれない。(3)教会員でない人々の間に幾つかの道徳的な問題がある。(4)多くの人々が結婚しないで同棲している。(5)、(6)、(7)、(8)……」こうして彼は、私がこれまで耳にしてきた最も消極的な問題の中から10~12の事柄を書き出してきました。私は内心、まさか彼が懐疑的な人々に影響されたのではと思いました。しかしリストの後にはこう書いてありました。「伝道部長にこのことだけは知っておいてほしいと思います。私はこのようなことのどれも信じてはいません。」そこには信仰がはっきりと表われていました。それから彼は自分の決意を明らかにし、信仰を表わして、こう書きつづっていました。「クック伝道部長、クリスマスの日(この手紙の日付は12月1日)、私たちは25人の人にバプテスマを施すつもりです。」

この手紙を読んで、私は彼のために祈りながら心の中でこう言いました。「長老、主はあなたを祝福して下さい。あなたは非常に強い信仰を持っているので、主が支えて下さるでしょう。あなたはその国も知らず、そこに住んだこともなく、自分がこれから住む所も知らず、新しい同僚になる人も、指導者も、会員たちも知らない、

何も知らないのに、それにもかかわらずあなたは25日間で25人にバプテスマを行なうと信じているのです。」

この若者は非常に信仰が強く、卓越したラテン系指導者の実例でした。12月25日、彼と同僚の宣教師は18人にバプテスマを行なったのです。25人には達しませんでした。それでも18という数字は、その国全体の1カ月平均のバプテスマ数に匹敵するものでした。それから2週間後、彼と彼の同僚はさらに11人にバプテスマを施し、私はそのバプテスマ会に出席するという素晴らしい特権にあずかりました。その日、彼の地区では約30人がバプテスマを受けました。皆さんは、ひとりの義人がどのようにして周囲の環境全体を変えることができるかお分かりでしょうか。彼は信じ、決意しました。そして、主と共にそれを成し遂げたのです。

あなたも主を完全に信じるなら、自分の生活にも他の人々の生活にも実際に良い変化をもたらすことができます。

「信ずる者には、どんな事でもできる。」  
(マルコ9：23)

まず、自分が持った義しい望みを成し遂げると決意しましょう。そして、信仰を正しく行使していくならば、その望みを実現することができるでしょう。

### 3. 自分の責任を果たす

全力を尽くして自分の分を果たして下さい。人は何かにつまずくと、自分の分を越えて主が何かをして下さるものと期待しますが、人が最善を尽くさなければ主の能力はその人に現われないことが、どの聖典にも書かれています。

人が心から犠牲を払い、能力の限りを尽

くして行なうならば、神は助けが必要な時に来て助けて下さいます。ヤコブが教えているように、「その行いによって信仰が全うされ」(ヤコブ2：22)るのです。

人は主が求めておられる犠牲を払うだけではなく、犠牲が求められる理由を理解するようにしなければなりません。主が私たちに罪を捨てるように強く求めておられます。主は私たちに罪を捨て、御自身が万人に求めておられる「へりくだりたる心と悔いる精神」を得るように望んでおられます。全力を尽くして自分の務めを果たして下さい。

### 4. 祈る

すべてを主にゆだねて祈って下さい。僕が頼んでいるのに、主がその犠牲を受け入れられないことがあるでしょうか。人はここまでではできても、実際に信仰の賜や神権の力を主に求めないことがあります。主は、「求めよ、さらば与えられ、叩けよ、さらば開かるることを得ん」(教義と聖約4：7)と教えておられます。

行動を起こすのはその人自身です。主は言われました。「この願いは、彼らの祈りが必ず聞き届けらるるとの信仰によりて聞き届けられん……。」(教義と聖約10：47)

必要に応じて行なう自らの祈りや断食の内に大いなる信仰を表わすならば、慈しみ深く、すべてを御存じであられる神は、その人の正しい願いを聞き届けて下さいます。自分の正しい望みがかなえられることを信じて、祈って下さい。そうするならば主の時にかなえられるでしょう。

## 5. 信仰の試しについて、あらかじめ知っておく

絶えずやって来る厳しい信仰の試しに対して備えて下さい。艱難は信仰を強めます。主は、「多くの艱難の後に祝福は来る」（教義と聖約58：4）と言われました。

主が人を誘惑されることは決してありません。主は試みられるのです。この世という学校は様々の苦難や問題からできていて、人生はすべて上流への旅、苦しい戦いです。時には速い流れから離れてしばらく休みたいと思うことがあるかもしれませんが、それでも前進し続けなければなりません。中には高原で立ち止まっていて、前進を続ける必要のある人もいます。彼らは熱心に祈りもせず、試練を正しい精神で受け入れることもしないのです。

私たちの多くの者が会おう様々の難題や苦難は、私たちを精練し、信仰深い人にしてくれます。主は人間の持っているあらゆる属性について、人生のそれぞれの時期にあなたを試みられます。どんな犠牲を払ってでも主に仕えることをあなた自身が知るようになるまで、主は幾度となくあなたを試みられるでしょう。

モロナイの言葉を読む時、何と心が安らぐことでしょうか。「私は、信仰とはまだ見ない物事を望むことであると世の人に教えたい。それであるから、あなたたちは自分がまだ見ていないからと言って疑ってはならない。信仰の度を試してからでないこと証が得られないからである。」（イテル12：6）

## 6. 主が果たして下さいを期待する

主の神聖なみこころとあなたの信仰に依じて、主が果たして下さいを期待しましょう。主の能力は現われます。（モーサヤ

14：1参照）主は聖徒たちを心にかけて下さいます。主は、あなたの模範によって他の人々が信仰を学ぶことを望んでおられます。主はあなたに事を起こしてもらいたいと望んでおられます。主の全能の力とあなたにある物事を主の方法で行なう力に頼るように望んでおられるのです。主はあなたが世俗的、一時的、表面的な事柄、つまり二義的な事柄に深く首を突っ込み過ぎないように望んでおられます。これらのことも行なわなければなりません、それにしても霊的に処理する必要があります。

あなたの祈りがあなたの望み通りにかなえられないことがあっても、信仰を失ってはなりません。すべての義しい祈りは、主の時に主の方法で答えられますが、その方法や時は私たちが望んでいるのとは違うかもしれません。時々祈りが聞き届けられないように思われる時、私たちの理解が及ばないような素晴らしい方法で答えられつつある場合もあります。このような試練にぶつかった時、私たちは信仰を失わないように倍の信仰を持つ必要があります。

何であれ主があなたに与えられるものを感謝の心を持って受けるようにして下さい。アルマは言っています。「あなたたちの中にどのような境遇にあっても進んでへりくだる人々（がいる）……。」（アルマ32：25）

同じことが感謝する心を持っている人にも言えるのではないのでしょうか。「あなたたちの中にどのような境遇にあっても感謝の心を忘れない人々がいる」と。

全財産を失った後に、ヨブが語った心からの言葉を思い出して下さい。ヨブはこう言っています。「主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな。」（ヨブ1：21）

従順に、謙遜に、忍耐強くあって下さい。そうすれば主はあなたにとって最も望ましいものを下さるでしょう。

ここで以上の6つの提案を実証する私自身の経験をひとつお話したいと思います。

1977年7月29日、妻と私はボリビアのサンタクルス伝道部の訪問を終えた直後、コチャバンバの空港で5時間ほど待たされました。その日、私たちは前の晩ほとんど睡眠を取っていなかったこともあって、ひどく疲れており、妻も私も飛行機の中で少し休めると喜んでいました。うとうとしていると、私は目を覚まして、考えを書き留めるようにという非常に強い気持ちを感じました。私は眠りたくてしょうがなかったのですが、みたまのささやきはもっと強いものでした。私は書きました。実際3時間近く書き、それまで何年かの間取り組んでいた組織上の問題を幾つか解決しました。私はその日あふれるばかりにみたまが注がれるのを感じ、靈感を受けたことを一つ一つ胸を踊らせながら記録しました。こうして遅れの時間のほとんどを過ごしました。

それから、ボリビアのラパスに向けて発ちました。私たちは空港でオールレッド伝道部長御夫妻の丁寧な出迎えを受け、おふたりの車で伝道本部に向かいました。私たちは荷物を車に残したまま降りて、車に鍵をかけました。

私たちが事務所に着くとすぐ、伝道部長は、困難な問題を抱えている女性に会いました。彼女の夫は、死にかけているということでした。オールレッド伝道部長と私が



**し**かし神の御言葉である木が生え始める時からその実の生る時を待ち設けながら勉めはげんで、気長によく信仰を以てこれを養うならば、その木は根を下ろして永遠の生命を生ずる木になるであろう。(アルマ32:41)



その女性の必要について考えている間に、妻とオールレッド姉妹は伝道部長宅に向かいました。

伝道部長と共に車にもどった時、私はすぐ、車に置いてあった荷物がすっかりなくなっているのに気づきましたが、妻が先に伝道部長宅に持って行ったものと思っていました。ところが、伝道部長宅に向かって車を走らせている間に、私は右側の前のドアが壊されているのに気づき、盗難にあったのではないかと心配になってきました。

伝道部長宅に着いて、荷物が実際に盗まれたことが分かりました。そして、かなりの金額と衣類全部を失ったことですぐにも困りましたが、それは一時的な問題に過ぎませんでした。何よりもがっかりさせられたのは、コチャパンパで受けたばかりの大切なアイデアと聖典がブリーフケースに入っていたことです。私は落胆と、怒りと、何も手を打てないという言いようのない気持ちに圧倒されてしまいました。

妻とふたりだけで祈り、他の人々とも一緒に祈りました。私たちは夕食を楽しむように努めましたが、できませんでした。私がどんなに大きな損害を受けたかはだれにも分からないでしょう。盗難にあった聖典は、私が若い頃両親からもらったもので、1冊には母の、もう1冊には亡き父の尊い言葉が記されていたのです。私は、大いなる価値があると考えてきた、唯一の有形の地上の財産に、文字通り何千時間もの時間を費やしてしるしを付け、また相互参照してきました。妻にも、もし家が火事になった場合はまず子供たちを連れ出し、それでもまだ時間があつた時には、他の物にはかまわないで私の聖典だけ持ち出してほしいと言ってきたほどです。

伝道部長と私はその夜だけしか一緒にいられなかったので、話し合うことがたくさんありました。けれども、私は聖典を取りもどすために手を尽くすべきであると強く感じました。夕食後、居合わせた全員でもう一度ひざまずいて祈りを捧げました。私たちは伝道本部の周辺一帯を搜索することにしました。泥棒は売れそうな物を取って、英語の本は捨てていったのではないかと思ったからです。

祈りの中で、私たちは聖典が無事もどってくるように、また聖典を盗んだ人が自分の悪い行ないに気づいて悔い改めるように、そして聖典が返ってくるのがだれかを真の教会に導く手段となるようにと願いました。

それから8～10人で懐中電燈を持ち、暖かい服装をして車に乗り込み、町にある伝道本部まで走らせました。私たちは通りの向こう側や通りに隣接している空地や裏通りを捜し、ガードマンにも通りがかりの人にも尋ね、できそうなことはすべてやってみました。見た者も物音を聞いた者もいなかったのです。私たちはがっかりして、仕方なく伝道部長の住居にもどりました。できることと言えば、個人的に祈り、待つことだけでした。オールレッド伝道部長と私は、その夜遅くまで働いて予定の仕事を終え、翌日妻と私は空路、私たちの住居のあるエクアドルのキートに帰りました。

それからの数週間、宣教師たちはあちこちを搜索してくれました。彼らは生け垣の中やごみ入れの中までのぞき、近くの公園を捜し、本が盗まれた場所の壁に本の返却を求める看板を出したりもし、付近の思いがけない場所に本が置かれてはいはしまいかと気をつけてくれました。まったくあての

ないまま、できる限りの手を尽くそうとしていた宣教師たちは、ふたつの日刊新聞に広告を載せることに決めました。盗まれた本について確かな情報を提供してくれた人には謝礼をするというものです。

キートに帰った私はまず霊的な努力をするのを始めましたが、それは私にとって非常に難しいことでした。それから3週間近くの間、私はまったく聖典を勉強しませんでした。何度も何度も試みはしたのですが、1節読むごとに、20年以上続けてきた多くの相互参照の中のほんのわずかしか思い出せなかったのです。私はすっかり気落ちして、何も読む気になれませんでした。私は何度も祈り、天父のみ名を高めること、天父から教えられた真理を教えること以外の目的に聖典を利用しようとしたことはないことを話しました。そして、聖典を返してもらうために必要なことなら何でもしますと約束しました。妻も幼い子供たちも絶えず同じ祝福を求めて祈ってくれました。2,3週間が過ぎても、まだ毎日、「天のお父さま、どうかパパの聖典を返して下さい」と祈り続けていました。

3週間ほどたった頃、私は強い霊的な気持ちを感じました。「クック長老、あなたはいつまで読みも勉強もしないでいるつもりですか。」私はひとつの試しのように思われ、求めている祝福を得るための「代価」として、何かすることがあるように思えました。その言葉が心に焼きついた私は、自分ももっと謙遜に、素直になってやり直さなければならないと思いました。妻から妻の聖典を使ってもよいという許可を得て、私は再び旧約聖書の創世記から読み始め、しるしを付けたり相互参照したりするのを始めました。

8月18日になって、友人のエビー・デビス兄弟がポリビアからエクアドルにやって来て、私の机の上に私の聖典を置いてくれました。コチャバンバで書いた書類と、最近作成した伝道部の予算案の入っていたホルダーも一緒に返ってきました。予算案の書類も盗まれていたのです。彼が言うには、もどってきた物はこれだけで、ラパスで塔乗の時に伝道部長から渡され、見つかった経緯は知らないが、ラパスに行ったら聞けるだろうということでした。私は伝道部を見て回るために数日の内にラパスに行く予定でした。

その時の喜び、またそれ以後の喜びは言葉に尽くせません。天父がラパスのような町で、泥棒の手から私の聖典や書類を奇跡的な方法で取り上げ、しかも1ページも取り去られたり、破られたりせずに完全な姿で返して下さったことを思うと、とても不思議に思います。家族の信仰と多くのポリビア人宣教師の信仰が報われたのです。その日、私は天父に、福音を教える主のみ手の器として聖典と時間をもっとよく活用することを約束したのでした。

8月21日、日曜日、私はエクアドルのグアヤキルへ飛び、翌22日ラパスに着きました。到着するとすぐ、次のような話を聞かされました。

ある女性がラパスの数ある市場のひとつに出かけて行ったところ、ひとりの酔っぱらいが1冊の黒い本を振り回しているのを目にしました。彼女は何か神聖な物が汚されているという非常に強い霊的な気持ちを感じ、その男に近寄って、何を持っているのか聞きました。男は分からないと言って、彼女にその本を見せました。彼女がほかに持っている物はないかと尋ねると、男はも

う1冊黒い本を出しました。彼女がさらに尋ねると、書類の一杯入ったホルダーを出してきて、焼いてしまうつもりだと言いました。そこで彼女がそれを男から50ペソ（約2.50米ドル）で買い受けたいと言ったところ、男もそれに同意しました。

買い取ってから、彼女は自分のしたことにすっかり驚いてしまいました。本も書類も英語だったので、英語を話すことも、読むことも、理解することもできなかった彼女は、英語の本を持っていてもしょうがないと思いました。自分が読めもしない言葉で書かれた本に月収の10パーセントも出して買うような人がいるのでしょうか。彼女はすぐ本の表紙に載っている教会を捜し始めました。そして多くの他の教会を尋ね歩いた後、主のみ手に導かれて、やっとラパスの伝道本部にたどり着きました。彼女は礼金のことも、ちょうどその日掲載されることになっていた新聞の広告のことも耳にしていませんでした。彼女は礼金はおろか、自分が支払った50ペソを要求することさえしなかったのです。長老たちは喜んで本を受け取り、何ほどこのお礼をしました。

自分はペンテコステ派に入っていると言いながらも、彼女は宣教師たちが福音を話すのをとても熱心に聞いていました。彼女は2,3年前、通りで拾ったパンフレットで、ジョセフ・スミスについて何か読んだことがあるのを思い出しました。彼女との最初のレッスンの後、宣教師たちはこのように報告しています。「彼女は実に素晴らしい人です。」2回目のレッスンを受けた後、彼女はバプテスマを受ける決意をしました。2週間後の1977年9月11日、日曜日の午後、ラパス第1支部で、マリア・クローフェ・カルデナス・テラス姉妹と彼女の息子マ

ルコ・フェルナンド・ミランダ・カルデナス（12歳）は、ダグラス・リーダー長老によってバプテスマを受け、真のイエス・キリストの教会に入ったのでした。

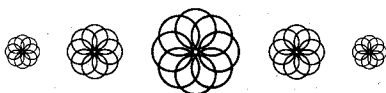
聖典を失った時どうにもできないために感じた、あの憂うつな、打ちひしがれた、耐えられない、意気阻喪した気持ちをだれが描写できるのでしょうか。また天の力がこのような奇跡的な方法で示されたのを目にした時の私の喜びを、だれが描写できるのでしょうか。主イエス・キリストへの信仰を行使するならば、天父は息子、娘たちの祈りを聞き答えて下さいます。主は言うておられます。「よく聞いておくがよい。だれでもこの山に、動き出して、海の中にはいれと言い、その言ったことは必ず成ると、心に疑わないで信じるなら、そのとおりに成るであろう。

のように、あなたたちが心の中に神の御言葉の根がつくように勉めはげみ、厚い信仰を以て気長に御言葉を養い育てるならば、やがてその言葉の実をとって腹に満ちるまでそれを食（う）であろう。（アルマ32：42）

そこで、あなたがたに言うが、なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう。」(マルコ11:23-24)

兄弟姉妹の皆さん、今は奇跡の時です。私たちは奇跡を信じています。末日聖徒はその信仰に応じた奇跡を望みます。この教会の会員として、皆さんは地上における神の王国の発展のために、それぞれの責任の範囲内で指導的な役割を果たす権能を与えられています。熱心に祈って下さい。積極的に信仰を強めるようにして下さい。そうすれば、神からの素晴らしい賜によって、自分の生活にも他の人々の生活にも大きな変化を起こすことができます。

主の祝福により、この責任を果たす力が与えられますように。主イエス・キリストを信じる信仰が私たちを支え励ましてくれることを心に留めておいて下さい。主は皆さんの学業や仕事、将来の結婚、家族に関して道を示して下さいでしょうか。示して下さいます。主は慈悲、赦し、忍耐、寛容に満ちておられるので、信仰あふれる皆さんのために祝福の詰まった宝の家の扉を開けたいと望んでおられます。



# 1日1個の りんご



リチャード・M・ロムニー

デュボン姉妹については宣教師ならだれでも知っていました。彼女の御主人のデュボン氏は、フランスの小さな支部の支部長でした。彼は地元の末日聖徒イエス・キリスト教会の発展のために献身的に尽くしてきた人でした。けれどもデュボン夫人は夫が教会員であることにいつも反対していました。彼女は夫がしているようなばかげたことがきらいだったので。また夫の証に耳を傾けようとしなかったし、

宣教師を家の中はおろか中庭にさえも入れようとしませんでした。

私が初めて先輩同僚に召されてこの街に来た日に、同僚のグランビル長老は支部長の奥さんは軽い病気にかかってようやく起きられるようになったばかりだと教えてくれました。

「それは丁度いい。彼女が良くなるように花束を持ってお見舞いに行こう。フェロシップにもなるかもしれないね。」

「君はデュボン姉妹のことを知らないんだよ」と同僚が言いました。(彼女は教会員ではありませんでしたが、私たちはほとんどの彼女を姉妹と呼んでいました)「どなりつ

けられるぐらいが関の山だろうね。」

病床に伏せていながらお見舞いの花束を断わる人があるなんて信じられませんでした。けれども、私は間違っていたのです。

花束は私が持ち、グランビル長老がおずおずとドアをノックしました。「そんなノックの仕方じゃとてもじゃないけど聞こえないよ。」私はそう言って思い切ってノックしました。すると60代ぐらいの白髪の女性が、窓越しにこちらをのぞきました。もう一度ノックすると玄関のドアが開きました。

「帰っておくれ。」彼女はどなりました。

「私たちはお渡ししたいものがあるんですが。」

「主人なら門の所へ置いてお行き。」

「帰ろうよ。」グランビル長老は声をひそめて言いました。

「あなたにお渡ししたいものがあるんです。」わめき声になりそうになるのをこらえて、私はもう一度言いました。

すると彼女は戸口から出て私たちの方へ近づいて来ました。

「もうだめだ」とグランビル長老はささやき、私のコートを引っ張りました。けれどもそうこうしている内に、彼女は私たちの目の前まで来てしまったのです。

「一体何を持って来たっていうのよ。」

「花束です。あなたが早く良く……」

「あたしは花束なんてきらいだね。」彼女は口をささみました。「大きいよ。」

「でも……。」

「あたしは花なんかきらいだって言うてるのよ。それに宣教師もね。だから放つといてちょうだい。」

「でも何かお好きなものがあるでしょう。」私はほとんど絶望を感じながらもそう言いました。

「そりゃあね。」彼女は答えました。「果物が好きだわ。新鮮なのがね。いつも果物

がないと気が済まないの。花束を持って来てくれて悪かったわね。でもあたしはこんなもの欲しくもなるともないのよ。」

そう言ってデュボン夫人は背を向け、家の中に入って行ってしまいました。

「さようなら。」私はドアに向かってフランス語でどなりました。「良い一日をお過ごし下さい。」フランスでこういうあいさつがあるかどうかは怪しいところでしたが、でも私は本当にこう言いたい気持ちだったのです。

「兄弟、君はついてたよ。」その場を離れると、グランビル長老はため息混じりにそう言いました。「前にストークリー長老と僕がデュボン夫人の家にあいさつに寄った時は、鼻先で門をびしゃりと閉められたんだよ。」

私は彼に花束を渡し、こう言いました。

「チラシ配りにでも行こうか。」

次の日は準備の日だったので、私と同僚はアパートの近くのマーケットへ買い物に行きました。私がりんごの箱を見つけたのはその時でした。

「ねえ、グランビル長老。いい事を思いついたよ。」

私は箱を持ってレジの方へ行きました。グランビル長老は1カ月間も食事のたびにりんごを食べさせられると思ったのか、こう言いました。

「そんなにりんごばかり食べられないよ。」

「僕たちが食べるんじゃないよ。これはデュボン夫人になんだ。」

彼は一瞬驚きのあまり口がきけませんでした。

「ロムニー長老、君は僕の先輩同僚の間では一番ばかげてるよ。」

「でも僕は君が宣教師訓練センターにいた時から数えても、まだふたり目の先輩だろう。」

「まあそうだけど、でもやっぱり君みたいなばかげた先輩は初めてだよ。」

その間店員は、ふたりのアメリカ人がりんごの箱を前にして何を言い争っているのだろうと不思議に思っていました。私は箱をカウンターの台に乗せました。

「箱ごと下さい。」

「箱ごとお持ちになるんですか。」店員は（もちろんフランス語で）聞き直しました。「それはよろしいですね。」そして努めて友好的に「りんごがよっぽど好きなのですね」と言いました。

「これは私たちが食べるんじゃないんです。友達にあげるんですよ。」

「お友達にですか。」店員は驚きを押し隠して言いました。「それはよろしいですね。」

「箱ごとだって。」グランビル長老は嘆きました。「その分の食費でヨーグルトを買うこともできたのにさ。」彼は残りの食料品を持ち、私たちは出口へ向かいました。

私たちはそのりんごを幾つか食べ、りんごのお菓子も焼きました。でも大半はデュボン夫人の元へ消えました。私たちはいつもりんごにメモを添えて郵便受けに1個ずつ届けました。そのメモはただ「良い1日をお過ごし下さい」の時もあれば、「早く良くなって下さい」の時もありました。「1日1個のりんごは医者を寄せつけない」という言葉をフランス語に訳してみたこともありましたが、前と同じようにその願いは心からのものでした。その月も終わりに近づきりんごもしなびかけてきたので、私たちは代わりにりんごの形に切った紙にメモを書き、郵便受けに入れました。

グランビル長老はいつも私のことをどうかしていると言いました。デュボン姉妹から返事もらったことは一度もありませんでした。デュボン支部長も教会では相変わ

らず優しく親しげでしたが、りんごのことについては一言も触れませんでした。

ある日私と同僚がお昼にスープを飲んでいると、ドアをノックする音がしました。私は食堂から玄関に行き、応待に出ました。ドアを開けた時、私とグランビル長老は自分の目を疑いました。そこにはデュボン姉妹がきのう届けたばかりのりんごのメッセージを手立っていたのです。

「どういうつもりであんたがたはこんなりんごを送ってよこすのよ。あたしのことをイヴだとも思っているの。」

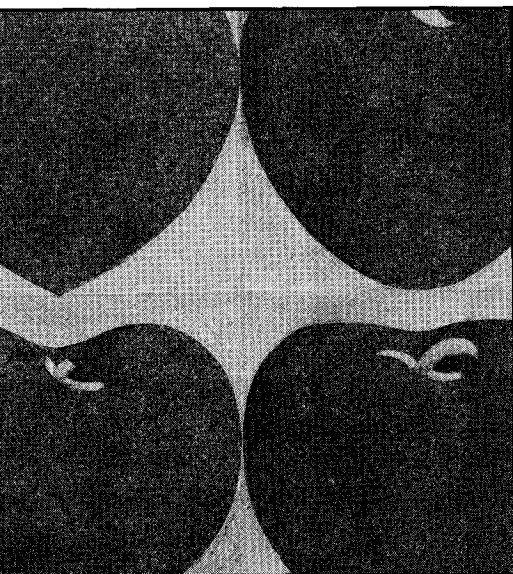
「私たちはただあなたを心にかけているということを知ってほしかっただけなんです。」

「それはどうもありがとう。」彼女は仕方なくこう言って、無理に笑顔を浮かべました。「でも頼むからやめてもらえないかしらね。このところりんごにはもううんざりよ。」そして彼女は黒のショールをしっかりと頭に巻き直し、私たちに背を向けて玄関を出て行きました。私は彼女を呼び止め、中に入ってもらおうとしたまさにその時です。

「ああ、そうだった。」出口の階段を上りつめたところで彼女は言いました。「主人があんた方を日曜の夜夕食に招待したいですよ。」

「夕食にですって。」後ろの方からグランビル長老の息を飲む音がしました。「デュボン姉妹と一緒にですか。」私は彼が気絶するのではないかと思いました。けれどドアが閉まると同時に、私たちはふたりで歓声を上げたのです。

デュボン姉妹の料理の腕は大したものでした。家庭料理とはいえ、フランス料理の素晴らしさに変わりありませんでした。その日曜の夜、私たちは満腹し、彼女に賛辞を贈りました。またデュボン兄弟の目にほのかな希望の色が浮かんでいるのに気づき



「どういふつもりであんたがたは  
こんなりんごを送ってよこすのよ。  
わたしのことを  
イヴだとでも思っているの。」

ました。彼が最後に宣教師を家に招待したのは遠い遠い昔のことで、彼がバプテスマを受けた時以来、17年ぶりになります。私たちは翌日曜日にも夕食に行きました。そしてその次の週も、そのまた翌週も招待されました。会話の中の端々の言葉からデュボン夫妻についての話をまとめ上げるとこうなります。

デュボン兄弟は、宣教師に会う前は乾き荒れ果てた土地をさまよっているようだったと話してくれました。そして偶然湖に行き当たったのです。福音の水は彼にとって豊かで新鮮なものでした。またどれだけ飲んでも飲み飽きるということがありません

でした。宝物を見つけ出した喜びに浸っているデュボン兄弟には、他の人がなぜこのメッセージを味わおうとしないのか理解できませんでした。こうしてふたりのコミュニケーションが悪くなり、結婚生活に支障を来すようになりました。デュボン姉妹は何が夫を変えたのか分かりませんでした。

彼女は食事をしながら戦時中デュボン兄弟がベッドに寝たきりになっていた時のことを話してくれました。彼女はどんなに食糧が不足していようが自分たちふたり分の食物を確保しなければならなかったそうです。毎日が彼の世話で明け暮れました。戦争が終わった後も、歩けるほどの体力がつかまで、常にデュボン兄弟の面倒を見なければなりません。さらにその後数年間、彼がリハビリテーションを受けている間もデュボン姉妹が家族を養いました。デュボン兄弟が仕事を始められるようになって間もなくすると、彼はふたりのアメリカ人と宗教の話をするようになり、彼らの教会に入ったのです。デュボン兄弟は街でただひとりの会員で、宣教師たちは川で彼にバプテスマを施しました。そして彼の生活は妻の方にはではなく、教会の方にどんどん傾いていきました。デュボン姉妹は夫を奪われたと感じ、街の人たちが彼女のことを狂信者の妻だと言って笑っているのを知り困惑したこともあったそうです。

デュボン支部長は、彼女に教会が真実であると証し、彼女とこの証を分かち合うためならどんなことでも厭わないということを何度も何度も口にしてきました。けれど「彼女はまるで聞こうとしなかった」のです。

「分からないのですか。」ある晩デュボン夫妻が激しく言い合った後私は言いました。「あなた方が本当に言いたいことはお互いに愛し合っているということなんですよ。デュボン姉妹、あなたはこの何十年間ずっと



とデュボン兄弟にもっと一緒にいる時間が欲しいとおっしゃってきたでしょう。それは大切だし正しいことなんです。それにデュボン支部長、あなたが一番望んでおられることは、姉妹と大切なものを分かち合うことでしょう。」

彼はうなずきました。私はデュボン姉妹の方を振り向きました。

「彼はあなたを愛していらっしゃるからこそ福音を分かち合いたいと望んでおられることがお分かりになりませんか。」

彼女は何も言いませんでしたが、頭では何か考えているようでした。私たちは静かに別れを告げ、アパートへ帰りました。

その夜グランビル長老は、率直に愛に満ちたお祈りをしました。

「天のお父さま、どうかデュボン御夫妻が理解し合えるように助けて下さい。彼らはふたりとも良い人なのです。」

私は「アーメン」を言いましたが、その響きがとても良かったので、もう一度口中でつぶやきました。

それからの2週間は私たちは別のレッスンの約束があり、その後は地方部大会のためボルドーへ行かなければなりませんでした。支部の用事で二度ほどデュボン兄弟の家に立ち寄りしましたが、私たちは1カ月近くデュボン家に招かれていませんでした。そこへデュボン支部長からの招待が来たのです。

「あなたたちには信じられないでしょうな。妻が教会の本を読んでおるんですよ。それで率直な質問をするんです。答えてやろうともしたんですが、どうもじゃぱり過ぎましてね。妻はまたあなたたちと話をしたがっているんです。」もしレッスンの約束がなければ、私たちはすぐにでも飛んで行ったでしょう。

「信じられないわね。」食堂でみんなでテ

ーブルを囲んでいる時、デュボン姉妹はこう言いました。「そんなこと信じられないわ。ばかばかしいと言ったほうがいいかしらね。14歳の子供が神様と話なんかできませんよ。それに聖書は完全なのに、どうしてその他にわざわざ聖典を持たなくちゃいけないの。神権にしたって神学校に行ったこともない主人がどうやって神権を持てるのか分らないわね。」

それらは良い質問でした。でもどのように答えたらいいのでしょうか。グランビル長老はこの時の彼女を見て、またもとのデュボン姉妹らしくなってきたなと考えていたのではないかと思います。大体それまでの彼女がおとなし過ぎたのです。そんな状態が長続きするはずがありません。

私がそんなことを考えていると、グランビル長老が穏やかな声で話し始めました。「私たちはあなたの疑問にすべて答えることができます。でも一度に全部は無理です。一つ一つ答えられるような、何回かにわたるレッスンがあるんですが興味がおありですか。」

彼女はあると答えました。

「どうとうやった。」私は心の中で叫びました。この後輩同僚にも望みが出てきたのです。

デュボン姉妹がゴールドデンの求道者になると断言はできませんでした。しかし私たちと友達になりつつあることは事実です。彼女は1回目のレッスンを熱心に聞きました。デュボン兄弟がひざまずいて祈る時には一緒に加わったりもしました。そして次の日曜日、彼女は再び私たちを夕食に招いてくれたのです。ピュレと呼ばれる薄いマッシュポテトを配り終わろうという時、グランビル長老はひとつの話をデュボン姉妹にしました。

「夕食の時、同僚にバターを取ってくれと頼んだ宣教師の話を知っていますか。バ



「デュボン姉妹がゴールデンの求道者になると断言はできませんでした。しかし私たちと友達になりつつあることは事実です。」

ターはその宣教師の目の前にあったんです、近くにありすぎて見えなかったんです。」

「どういふこと。」

「簡単なことです。デュボン姉妹と福音のようなものですよ。ずっと前からご主人は福音をテーブルの上に出しておいたのですが、近くにありすぎてあなたは気づかなかったんですね。すぐ目の前にあるのにバターはどこにあるのかと探し続けてきたんですよ。」

この話はそれほど強い感銘を与えるようなたとえではなかったかもしれませんが、グランビル長老はとにかくやってのけました。その夜アパートへ帰ると彼は一冊のモルモン経を持ってきました。

「ここにふたりでサインしようよ。」表紙の裏のページをめくりながら彼が言いました。「そしてデュボン姉妹にあげるんだ。」

そこにはフランス語でこう書いてありました。

「そのバターがここにあります。」

それからの2カ月間でデュボン姉妹は少なくとも半分以上モルモン経を読み終わりました。さらに彼女はふたつのレッスンを終え、祈り、デュボン兄弟と話をする機会はどんどん増えてきました。彼の顔はいつ見ても、幸せがどんどん膨らんでいるという表情をしていました。そんな時私に転勤の通知が来たのです。

私は最後の伝道地ブルターニュへ行くことになり、グランビル長老は3人目の先輩同僚を迎えることになりました。郵便局のストライキのために通知は遅れて届きましたが、私は次の日の始発の汽車に乗ることになっていました。

「出発できる状態かどうかは分からないんだけどね、グランビル長老。僕たちはここで一生懸命やってきたね。支部長は元気を取り戻して会員と一緒に働いてるだろう。不活発会員も何人か教会に来るようになったし、ゴールデンの求道者もふたりいるしね。マルセラス家族だってもうバプテスマを受けられそうじゃないか。もう僕は君に任せられると思うよ。」

その時だれかがドアをノックしました。

「デュボン支部長じゃありませんか。」グランビル長老が応待に出ました。「どうぞどうぞ、お入り下さい。」

デュボン支部長は私の方を見ました。

「転勤のこと聞きましたよ。明日出発だそうですね。妻が別れのあいさつに来て欲しいと言ってるんですがどうでしょう。」

まだ荷作りの終わっていないものもたくさんあったし、あいさつしなければならぬ人も何人かいました。でもデュボン姉妹の家へはあいさつに行くつもりだったので、私は「もちろん、お伺いしますよ」と答え

ました。

デュボン家の居間はフランスの一般家庭の例にもれず、薄暗い裸電球がぼつんと灯っているだけでした。でも壁紙は褐色と黄色と黄褐色が明るい調和をなしていました。デュボン姉妹はクッキーのお皿とホットチョコレートを前にして、オレンジ色の長椅子に座っていました。

「こんにちは、長老たち。お座りなさいよ。ロムニー長老はよそへ行くんですってね。」

「残念ながらそうなんです。明日の朝出発の予定です。」

「ということはまた新しい宣教師がここにやって来るってわけね。」

「そうなんです。テイラー長老といってニューヨーク出身なんだそうです。」

「そしたらまたその長老とも知り合いにならなきゃならないだろうね。」

デュボン支部長の顔には微笑が浮かびました。

「そうしていただけたらと思います。」

「私たちに手紙をくれる。」

「もちろん出しますよ。信用して下さい。」

「長老を信用できないとしたら一体だれを信用したらいいっていうの。」

私は涙が出そうになりました。

伝道を終えてからの5カ月間、私たちは特に連絡を取り合いました。デュボン支部長は私よりも頻繁に手紙を書いてくれるので返事を出すのが大変でした。けれども私たちは写真やクリスマス・カードを交換したり、家族の近況を報告し合ったりしました。(スペインの海岸で休暇を過ごしているデュボン夫妻とお孫さんたちの楽しそうな写真が今でも私の手元にあります)私が簡単な葉書きを出しただけの時も、デュボン支部長は必ず便箋何枚もの返事をよこしてくれました。またグランビル長老から便り

を受け取った時は、特にその内容を詳しく教えてくれました。手紙にはいつもデュボン姉妹がよろしくと言っていると書いてありましたが、姉妹自身が書いたものは受け取ったことがありませんでした。他の宣教師たちから聞いたのですが、彼女は友好的で夫の良き支えとなっていますが、教会員にはなっていないということでした。私は時々彼女に手紙を書いて、自分の証を述べたりもしました。

こうして伝道を終えて何年かたったわけですが、今週、フランスから一通の手紙を受け取りました。差し出し人の住所や筆跡は見覚えのないものでした。私は机に向かうのを待たずに中を開けてみました。

「親愛なるロムニー長老、私は何年も前からあなたにお便りしたいとずっと思っていました。手紙を書くのはいつも主人に任せっきりでした。けれどもその主人も今はもういません。他の宣教師たちにもあなたからお伝えしてほしいと思い、ペンを執りました。主人は宣教師を本当に愛していました。教会員がお葬式を出して下さい。私も合わせてお伝え下さい。」

私はあなた方ふたりが、死んだ後の世界について教えてくれたことをよく覚えています。多分主人は長老たちがおっしゃったように、そこで私が来るのを待っているでしょう。私は教えていただいたことや主人が分かち合いたがっていたことすべてを理解できたわけではありません。でも主人や長老たちがそう信じているということは分かりました。私は今、娘家族と暮らしています。もしよろしければお返事を書いて下さい。」

もちろんですよ、デュボン姉妹。もちろん書きますとも。

(この話は事実に基づいたものです。人物名は仮名となっています)

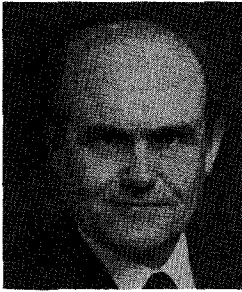


# ちい とも 小さなお友だちへ



## いち ばん たい せつ 一番大切なこと

しちじゅうにんだいいちていいんかいかい  
七十人第一定員会会員



エフ・  
エンツイオ・  
ブッシュェ

**ま**だ学校に通っていたころ、  
わたしは、勉強は学校で  
しかできないものだと思って  
いました。本当のことをいうと、  
わたしは、学校があまり好きで  
はなかったのです。わたしが勉  
強したいことを、先生が教えて  
くれなかったせいかも知れませ  
んし、先生のおっしゃることを  
聞く気持ちも、わたしになかつ  
たせいかも知れませぬ。今、わ

たしは50才ですが、くろうして  
物事がわかった時の気持ちほど、  
すばらしいものはないと思つて  
います。

勉強しなければならぬこと  
は、たくさんありますが、だれ  
もが知らなければならぬ一番  
大切なことは、ひとつだけです。  
それは、わたしたちはみな、天  
のお父様の子どもだということ  
です。まだ小さいから、まだ子  
どもだからといって、天のお父  
様から愛されない人など、だれ  
もいません。わたしは、11才の  
時に、天のお父様の愛を知りま  
した。そのころ、わたしの父や  
母は、あまりしんこう深い人で

はありませんでしたが、でも、  
いい人でした。わたしを愛して  
くれて、よい人になるように、  
心のきよい、うそをつかない人  
になるようにと教えてくれました。  
また、正しい望みが持てる  
ように、助けてくれました。父  
も、母も、いつも真理にがん心  
を持っていましたが、神様のこ  
とを知らなかったので、わたし  
に神様のことについては、教え  
てくれませんでした。そのころ、  
わたしは、神様がどんな方なの  
か知りたいという気持ちを持ち  
かけていました。でも、まだ、  
神様について知っていて、それ  
を教えてくれる人を見つけよう  
というような気持ちには、なれ  
ませんでした。

ある時、わたしは、事こで死  
んだ人を見ました。わたしは、  
はじめて「死」というものに出  
会い、心がゆさぶられるようで、  
2、3日ねむることができず、  
病気になってしまいました。死

んだ後はどうなるのか、教えて  
くれる人はだれひとりいません  
でした。わたしの心の中に、「お  
父さんが死んでしまったらどう  
しよう。お父さんがどこへ行っ  
てしまうのか、せつ明できる人  
はだれもいないのだ」という、  
おそろしい思いがわき上がって  
きました。

しばらくして、第二次世界大  
戦が起きました。戦争の間、  
わたしは母や姉や妹といっしょ  
に家をはなれ、ドイツの南の方  
に、小さなみすばらしい部屋を  
ふたつかりて住んでいました。  
はげしい空しゅうのために、わ  
たしたちは、にげてこなければ  
ならなかったのです。わたした  
ちの町は、空しゅうでめちやめ  
ちやにされ、わたしたちも、あ  
ぶない自にあいました。父は、  
わたしたち家族からはなれ、軍  
隊に入りました。わたしは、ま  
だ小さかったので、あのおそろ  
しい戦争の間に、わたしのまわ

りで大へんなことがたくさん起  
こっていたことなど、わかりま  
せんでした。

ある夜の<sup>よ</sup>こと、わたしは姉<sup>あね</sup>や  
妹<sup>いもうと</sup>と一<sup>いつ</sup>しよの部屋<sup>へ</sup>にねていま  
したが、ひどくさびしい<sup>さき</sup>気持ちに

---

## この地上に生きる 目的は何なのだろ う……？



---

なりました。となりの部屋<sup>へや</sup>には、  
田<sup>は</sup>と姉<sup>あね</sup>がふたりねていました。

でも、なれない土地<sup>とち</sup>のちつぽけ  
な家<sup>いえ</sup>の中に、おきざりにされた  
ような<sup>さき</sup>気持ちを、かき<sup>け</sup>消<sup>け</sup>すこと  
はできませんでした。その土地<sup>とち</sup>

の人々<sup>ひとびと</sup>は、わたしたちの言葉<sup>ことば</sup>と  
はちがうなまりの言葉<sup>ことば</sup>で話<sup>はな</sup>しま  
した。わたしの心<sup>こころ</sup>の中<sup>なか</sup>に、大き  
な<sup>お</sup>ぎ問<sup>もん</sup>が起<sup>お</sup>こってきま  
した。「この地上<sup>ちじょう</sup>に生きる目的<sup>い</sup>は何<sup>もくてき</sup>なの  
だろう。」わたしは、この<sup>さき</sup>ぎ問<sup>もん</sup>に答<sup>こた</sup>  
えることができませんでした。  
するとすぐに、またべつ<sup>も</sup>の<sup>もん</sup>ぎ問<sup>もん</sup>  
が起<sup>お</sup>こってきました。「『永遠<sup>えいえん</sup>』  
って何<sup>なん</sup>だろう。」

わたしは、深<sup>ふか</sup>く考<sup>かんが</sup>えて、答<sup>こた</sup>  
えを見<sup>み</sup>つけようとしてしました。でも、  
「永遠<sup>えいえん</sup>」について考<sup>かんが</sup>えれば考<sup>かんが</sup>  
えるほど、わたしは、おきざりに  
された、見<sup>み</sup>はなされたという<sup>き</sup>気  
持ちにな<sup>も</sup>ってくるのでした。す  
がりつくものも、ささえてくれ  
るものも、ありませんでした。  
ただ、かぎりなく深<sup>ふか</sup>いあなに、  
どんどんおちていくようでした。  
それは、とてもおそろしい<sup>さき</sup>気  
持ちでした。

今<sup>いま</sup>でも、その部屋<sup>へや</sup>のすみずみ  
まで、目<sup>め</sup>にうか<sup>か</sup>んできます。月<sup>つき</sup>  
の青白<sup>あおしろ</sup>い光<sup>ひかり</sup>。そして、15分<sup>ふん</sup>ごと



---

あなたは、わた  
しの子なのです  
よ。わたしをし  
んじなさい。

---

に鳴る<sup>な</sup>教会<sup>きょうかい</sup>の時計<sup>とけい</sup>の音<sup>おと</sup>まで聞<sup>き</sup>こ  
えてくるようです。わたしは、  
夜明<sup>よあ</sup>けまで、起<sup>お</sup>きていました。  
そして、とうとう、どうしよ  
うもなくなって、なきだしてしま  
いました。わたしは、長<sup>なが</sup>いこ  
なっていました。

とつぜん、何<sup>なに</sup>かがかわりまし  
た。何<sup>なに</sup>か心<sup>こころ</sup>をなぐさめてくれる  
力<sup>ちから</sup>が、わたしをつつみ、心<sup>こころ</sup>に小  
さな声<sup>こえ</sup>がささやきかけてきまし  
た。「あなたは、わたしの子<sup>こ</sup>  
なのですよ。わたしをしんじなさ  
い。」心<sup>こころ</sup>の中<sup>なか</sup>に、とつぜんパツ  
とよるこびと幸<sup>しあわ</sup>せがひろがりま  
した。おそろしさや、さびしさ  
や、ぜつぼうは、温<sup>あたた</sup>かい、よい  
気<sup>き</sup>持<sup>も</sup>ちにかわりました。その夜<sup>よ</sup>

わたしは、目には見えないけれども、わたしを心にかげ、わたしを愛してくださる方がいらっしやることを、はじめて知りました。のぞみをなくし、助けがほしかった時に感じたこの気持ちは、本当にとくべつな気持ちでした。

わたしは、まだまだこれから、天のお父様の愛について、たくさん学んでいくことだろうと思いますが、これまでも、いろいろとわいてきなけいけんをしてきました。わたしは、わたしが見いだした神様について書いてある本を、全部読もうと思いました。そして、いろいろな教会に行きました。でも、それから18年後、末日聖徒イエス・キリスト教会の長ろうが、わたしの家のドアをノックするまで、わたしは、本当には神様のことがわかりませんでした。その時から、わたしは、天のお父様について知るようになりました。

また、どうしたら天のお父様とせいやくをむすぶことができるのか、どうしたらいつも天のお父様とお話することができるのかも、わかるようになりました。わたしは、「天のお父様は、わたしの気持ちをわかってくださるのだ、わたしをよろこんでわかえてくださるのだ」と思いました。

みんな、だれでも、天のお父様の本当の教会に来れば、やすらかな気持ちになれます。天のお父様の教会は、天のお父様をもとめる人、そして、いつの日にかまた天のお父様と一しょにくらしたいと思っている人、天のお父様のしもべである生ける予言者のみちびきに、よろこんでいたがう人、みんなのものなのです。

この人生の中で、天のお父様について知ること、そして、その教えにしたがうことほど大切なことはありません。



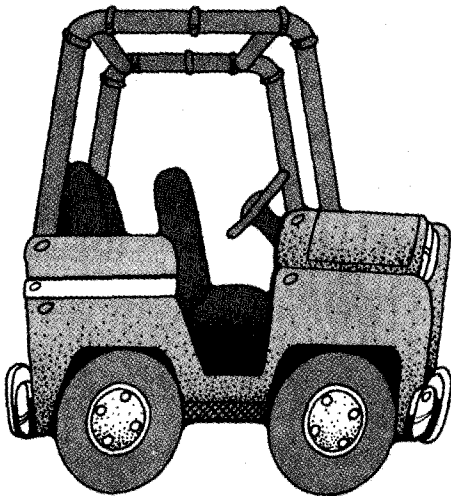
# しんこうってなに？



おはなし：キャロライン・キャンベル

□ンくんは、ジョーくんとおそびたくて、しかたがありませんでした。ジョーくんは、おもちゃのじどうしゃを3つももっているのです。

「ねえ、ママ。ジョーくん、でんわしてくれるかなあ？」  
□ンくんは、ききました。



「してくれるわよ。□ンくん、しんこうをもたなくてはだめよ。」

「しんこうって？」

「きのう、かていのゆうべでならつたでしょう。しんこうっていうのは、まだそうなるとはわからないけれども、そうなるとしんじてまつこと、だつたわね。たとえば、はるのつぎには



なつがくるって、ロンくんはしんじているでしょう。」

「うん。」

「それから、パパがかいしゃからかえってきたら、だつこしてくれるってことは？」

「うん、ぼく、しんじてるよ。」

「それが、しんこうなのよ。」

そのとき、リリーンとでんわがなりました。ジョーくんからでした。ロンくんは、ジョーくんのおうちへ、はしつていきました。

ロンくんとジョーくんは、おすなばで、<sup>おお</sup>大きなとうをつくることにしました。すなだけだと、くずれてしまうので、すこし<sup>みず</sup>水をまぜました。あたたかいすなに、<sup>みず</sup>水がちよつとつめたくて、いい<sup>き</sup>気もちでした。

とうとう、できあがりしました。

「すごいや。こんなに<sup>おお</sup>大きなのをつくったの、はじめてだね。ぼく、あの<sup>き</sup>木にのぼって、ながめてみたいなあ。」

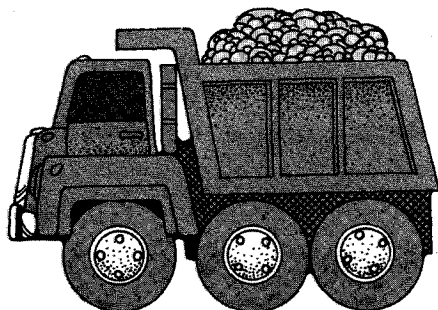
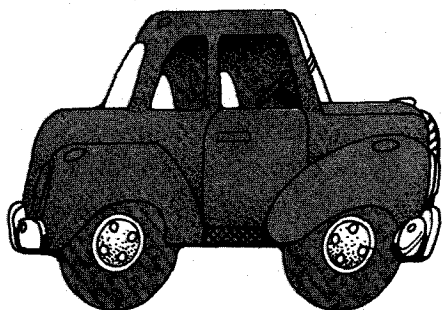
ロンくんは、はしって行って、<sup>き</sup>木にのぼりはじめました。でも、<sup>あし</sup>足がすべって、とちゅうでおっこちてしまいました。「あいた！」とおもったときには、もうじめんの<sup>うえ</sup>上で、あごをすりむいていました。

「ちが<sup>で</sup>出てるよ！」ジヨーくんは、おうちの<sup>なか</sup>中へはしっていきました。

すこしすると、ジヨーくんとジヨーくんのママが、はしってきました。

「まあ、ロンくん。おうちの<sup>なか</sup>中<sup>はい</sup>に入って、お水<sup>みず</sup>であらいましょう。それから、ママにでんわして、きていただきましょうね。すごく、いたい？」

ロンくんは、こつくりうなずきました。なきだしてしまいそうで、おはなしすることもできなかつたのです。





ロンくんは、ジョーくんのママがロンくんのママに、でんわでおはなしをするのを、きいていました。ロンくんは、『ママは、<sup>おお</sup>大いそぎできてくれるにちがいない』とおもいました。そして、けさ、ママが「しんこうっていうのは、まだそうなるとはわからないけれども、そうなるとしんじてまつこと」だっていったのを、おもいだしました。

ロンくんは、おもいました。『ぼくには、しんこうがあるんだ。もうすぐ、ママがきてくれて、おうちにつれてかえてくれる。もう<sup>だい</sup>大じょうぶなんだな。』それから、ロンくんはあんしんして、ジョーくんのベッドで、ぐっすりねむってしまいました。

# エリヤと神の力

アハブは、イスラエルの王さまの中で、一ばんわるい王さままでした。アハブがあんまりわるいことをするので、エリヤはいました。「イスラエルの神は、生きておられます。わたしがめいれいしなければ、何年かのあいだ、雨もふらなければ、つゆもおりないでしょう。」

しばらくして、ききんがひどくなると、神さまはエリヤにいわれました。「立って、ザレパテの町へ行きなさい。やもめの女が、やなってくれるでしょう。」

エリヤがザレパテの町の門のところに来ると、やもめの女がたき木をひろっていました。エリヤは、やもめの女をよんでいました。「水をのませてくれませんか。」

女が水をとりていこうとすると、エリヤは、またいいました。「パンもすこしてください。」

すると、女はこたえました。「うちには、パンがないのですよ。ほんのひとつかみのこなと、あぶらがすこしあるだけなのです。わたしは、わたしとおすこのためにそれで何かを作ったべ、それからしのうとおも



っていたのです。」エリヤは、いいました。「おそれるには、および  
ません。まず、わたしのためにちい小さなパンつくを作って、もってきてく  
ださい。それから、あなたとあなたのかみむすこさんのために、パンを  
お作りなさい。イスラエルの神が、あめ雨を地ちにひふらす日ひまで、かめの  
こなも、びんのあぶらもなくなるらない、とおっしゃっています。」

やもめの女おんなは、エリヤのことばどおり、エリヤのためにパンつくを作  
りました。それから何日なんにちものあいだ、やもめの女おんなとそのむすこは、  
パンをたべることができました。

ところが、ある日ひのこと、やもめの女おんなのむすこがきびょう気になり、



とうとうしんでしまいました。やもめの女は、なきながらエリヤに  
いいました。「あなたは、わたしのむすこをおんなしなせにおいでになっ  
たのですか。」

エリヤは、こたえていいました。「むすこさんを、わたしによこ  
しなさい。」エリヤは、やもめのむすこをだきかかえると、やねう  
らへのぼっていき、自分のベッドにねかせて、神さまにいのりまし  
た。「神よ、どうか、この子のれいを、この子のかみ体にかえしてくだ  
さい。」

神さまは、エリヤのいのりをきいてくださいました。れいがからだ体  
にかえってきて、子どもは生きかえりました。エリヤは、子どもをだ  
きかかえて、やもめのところへもどり、やもめにかえして、いいま  
した。「ごらんなさい。むすこさんは、生きかえりました。」

やもめは、うれしくなって、さげびました。「あなたは、ほんとう本当に神  
のひと人です。あなたがかたる神のかみことばは、ほんとう本当です。」



## 教会教育部 東京インスティテュート 第1回卒業式

**開** 設後2年を経た東京インスティテュートでこの3月18日(金)、初めての卒業式が催されました。東京地区は東京北と東京南のふたつの地区に分かれているため、今回の卒業式は、鈴木正三長老(東京北地区担当地区代表)と相良健一長老(東京南地区担当地区代表)の管理下で合同で行なわれました。

インスティテュートで卒業証書を受けるためには、モルモン経の全コースを含めて8コースの単位を取得しなければなりません。また、モルモン経の1コースを含めて4コースの単位を取得した人には、達成証書が授与されます。そのような条件の下で、今回は、卒業証書受理者が6名、達成証書受理者が65名と、多くの兄弟姉妹たちが証書を受領しました。

東京インスティテュートへの登録者の中から、本年3月末までに、53名の兄弟姉妹たちが専任宣教師として伝道の業に召されたことを考え合わせると、立派な実を結んでいると言えるのではないのでしょうか。

東京インスティテュートへの登録者は、2年前の開設以来、800名を超えています。このように発展し、大勢の方々学び続けてきたため、本年4月に、東京インスティ



●相良健一長老から達成証書を授与される姉妹

テュートは、ふたつに分割されました。そして次のように改名されました。

1. 東京渋谷インスティテュート  
担当ステーク部——東京、東京南、東京西、横浜、町田
2. 東京池袋インスティテュート  
担当ステーク部——東京北、東京東

インスティテュートで学び、  
生活を変えている  
兄弟姉妹たち

東京渋谷、東京池袋の両インスティテュートでは、「モルモン経」や「新約聖書」、「教義と聖約」など、標準聖典に基づいたコースを初め、伝道あるいは結婚の準備のためのコースなど、数多くのコースが設けられており、大勢の兄弟姉妹たちが登録して学んでいます。そこで、これまで様々な



コースで学んできた兄弟姉妹たちが、インスティテュートでの勉強をどのように感じ、またどのように生活を変えてきたのかをご紹介します。

### ♣信仰は行ないで示すもの♣

「インスティテュートで学ぶことにより、信仰というものは行ないで示すもの、勇気と愛をもって行なうものであることを知りました。私の生活の中にそのことを生かそうと努めました。

まず食糧貯蔵を始めることにしました。まだまだ家族で食べるには雀の涙ほどですが増えました。そして、庭の手入れもして、春には種をまくつもりです。また、これからも毎月必ず食糧を買うことにしました。

次に何といっても私の生活の最大の変化は食卓における祈りです。まだ声を出して祈るわけではありませんが、以前は祈りの中で、一日の食物の祝福をしていましたが、伝道に出る決心を両親に告げてから、家族の前で祈ることができるようになりました。父と母を前にして、食事の準備してくれた母に感謝をし、良く働いてくれる父に感謝をすることができることは本当にすきです。また、最初は私がうつむいて祈っている時にも平気で話をして

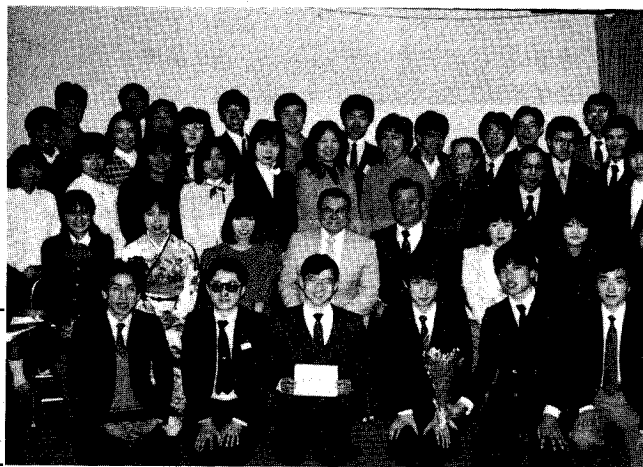
いたふたりが、このごろは静かにしてくれることも変化です。いつか家族と共に祈り、聖典を学び、教会に集える日の来ることを望んでいます。勇気をもって行なう時に、良い結果が得られて本当にうれしく思っています。」

### ♣「私、伝道に出ます」♣

『私にできるのかしら』伝道という言葉聞いても、いつもそんな気持ちが起こるだけ。でも、今は違います。『私にはできます。』『私はやります。』そんな思いと態度をこの130コース『福音を分かち合う』は教えてくれたのです。

クラスのみながいつの間にか、宣教師になりたいと思うようになったのです。少し考え方を考えるだけで人生が広がりました。少し決心しただけで神様はもっと近づいて下さいました。『私、伝道に出ます。』  
(「福音を分かち合う」コース受講者)

●東京インスティテュート第1回卒業式で証書を手にした兄弟姉妹、教師ならびに指導者。



## ♣主の再臨に備える♣

「今強く感じるのは、本当に、主の再臨の日が近いということです。「汝らに備えあらば怖ることなからん」と言われていますが、私はこの聖典を学んでいて、私たちが備えなければならないことはとてもたくさんあるということを知りました。と同時に、神様が私たちに大いなる期待をかけておられ、また私たちが成長し、備えをすることができるように一人一人に方法を備えておいて下さることを知りました。

今は、本当に、自分の証を進んで他の人々に伝え、また神様に感謝し、主の再臨の日を心待ちにできるよう努力したいと思っています。信仰の芽を少しずつ伸ばしていきたいように頑張りたいと、心から思っています。」(「教義と聖約」コース受講者)

## ♣デートと結婚♣

「女性に対する態度を変に意識することがなくなり、よくなったと思います。また、女性を見る時に、永遠の同僚にできるかどうかという永遠の見地から見られるようになりました。

以前はデートなど、と思っていましたが、このコースで学んで、デートが人生の中で非常に重要な位置にあることが分かりました。そして今、なるべくデートをするように努めています。

また、結婚後の家庭生活が抽象的でなく、具体的に自分の中でまとめられるようになりました。主が結婚をととも神聖かつ楽しく、大切なものとして私たちに求めておられることがよく理解できました。」(「日の光栄の結婚の準備」コース受講者)

# モルモン パイオニア

—父、危篤の知らせ  
を受けて—



元岡山伝道部  
専任宣教師  
静岡ステーク部  
浜松ワード部

杉山 雅俊

私

も2年間という期間を主に捧げる機会に恵まれ、半年前伝道を終え浜松に帰りました。

ちょうど1年半位前、広島県で伝道していました。土曜日の午後、私たち4人の宣教師は英会話教室のため教会にいました。

そこに伝道部長から私に電話がありました。「杉山長老、あなたのお父さんが危篤状態だとお母さんから電話がありました。すぐ家に電話しなさい。そしてこちらに電話するように。」目の前が真っ暗になりました。それでも受話器を取り直し、家に電話しま

した。母からすぐ帰るように言われ、私は思わず「はい」と答えました。これは夢でなく事実だったのです。ちょうどそこに大管長スペンサー・W・キンボール長老の写真があり、私はそれを見つめながら、「私はあなたを信じて伝道に出ました」と心の中で繰り返し呼び続けました。

アパートにもどってから、伝道部長に電話をしました。彼は「日本人宣教師の場合、そのような時帰ることができます。自分で決めてもう一度電話するように」と言われました。私は祈りました。そして約2時間後、父の入院している病院に電話をしました。兄が出ました。私はその時、電話の向こうの兄に「家に帰れないけれど、そのことを母に言っておいて下さい」と話しました。

その後で伝道部長に電話をしました。「帰れません。宣教師の務めは神様の召しですから」と言うと、伝道部長は「聖書には死にそんな人は、そのまましておきなさい。とあるが……。杉山長老は頑固です。あなたの母さんは優しいですか」と問われ、私は「はい」と答えました。伝道部長は続けて、「お母さんは悲しみますよ。たとえお父さんがよくなったとしても、その時自分の子供が帰って来てくれなかったということで教会のイメージは、崩れてしまいます。杉山長老、私たちは『モルモン・パイオニア』です。これは伝道部長命令です。1週間休暇を出しますから今すぐ帰って下さい。」

病院では癒しの儀式を行ないました。そしてその日を境にして父の状態は好転し

ました。頭の病気で脳の中に膿がたまり、それが全身にまわって危篤状態になったそうです。今でも担当医師は父に「これは奇跡です。残りの人生を大切にしてください」と言われるそうです。

1週間の休暇を終え伝道に戻る時、父は私の名前はまだ思い出せないようでしたが、父に「あと1年頑張ります」と言って家を後にしました。その月私と同僚は多くの求道者に恵まれ、たくさんの改宗者を得ました。連続して11週間も、毎週毎週バプテスマ会がありました。バプテスマ会はちょうど父が退院する頃まで続いたのでした。その頃の伝道は街頭伝道が中心でしたが、いつも心の中に「父はどうしているかな」との不安がありました。「ここで今伝道することは、神様の召しを果たすことです。父のことは神様にお任せします」と心の中で呼びながら伝道しました。

無事2年間の伝道を終えることができたのは神様のお陰です。伝道から帰ったある日、母から「お兄さんはあの時、帰らないと言っていたから、『もうあいつとは兄弟の縁を切る』と言っていた」と言われました。

教会の指導者は、神様から召された人であることを私ははっきりと証します。私は本当に神様とイエス・キリストが今でも生きておられることを証します。

これからもこの浜松の地で『モルモン・パイオニア』として、毎日を生きていこうと思っています。（すぎやま・まさとし  
1954年生まれ）

# 母からの知らせ

—夢の中に母が現われ—

仙台ステーク部仙台第2ワード部

吉田 美恵子



19

80年12月15日、大雪の降る深夜、私の母がたったひとりで息を引き取りました。事情があって、小さい時に別れてしまった母ですが、私が成人し、家庭をもってからは私たち子供の家庭を1年に数回尋ねることを何よりの楽しみとして、遠く離れた土地に、ひとりで仕事に励んでいた母でした。ひとりということと、無理な仕事が多かったのでしょうか、突然58歳という若さで逝ってしまいました。

私はその時妊娠していましたが、本当につらい思いを致しました。そして、亡くなる寸前の母の無念の気持ち、私や兄たちを求めた心を思うたびに胸がかきむしられるほどのつらさを感じました。生前、母は私がモルモンになったことをとても悲しんでいました。ある時、母は私が大好きだった一番いいお茶と、お菓子を買って遊びに来てくれたことがあります。私が喜ぶ顔を期待して来たのですが、それができず、「一緒にお茶も飲めないなんて」とひどく嘆いていました。

亡くなってからは、悲しい思いをさせたと、そのことばかりが私を苦しめました。ひとりで亡くなった時の母の悲しみを思う気持ちが私から離れませんでした。そんな重苦しい心のまま、私はどんどん教会の教えから離れていってしまいました。母が夢の中に現われたのは、亡くなって半年ほど過ぎた頃です。それまで私は、夢でもいいから母に会いたいと思っていました。

その夢の中で、母と私はある停留所でバスを待っていました。突然行く先の違うバスに母が乗り込んでしまいました。私はそのバスは違うから降りてと叫んでいるのに、ドアは閉まり悲しい顔で振り向いた母を乗せてバスは走り去ってしまいました。私は泣きながら追いかけました。目が覚めた時、やはり悲しくって泣いてしまいました。

それからしばらくしてまた母が夢に出てきました。「風呂に入りたい。」自分の体が汚くなってしょうがないといった感じでたった一言「風呂に入りたい」と言うのです。それだけの夢でした。私はこのことでまたしばらくの間考えてはふさぎ込み、また悶々として暮らさなければなりません。

ある時など本当にお風呂を夜中に沸かして寝たりもしました。教会にも行かず、考えることといったらそのことばかり、私はどんどん信仰とはかけ離れた生活をしてゆくようになりました。以前は私だけは神様やイエス様を疑うことはないと思っていたのですが、私の中にも迷いが現われ始めました。

また何か月ほどかして母の夢を見ました。苦悩した顔をこちらに向けて「汚いから洗ってくれとあれほど言ったのに」というのです。はっと目を覚ました時、4時頃でしょうか、台所の床に座り込んで、考え込んでしまいました。すると心にある答えが沸き上がってきました。「えっ？ もしかするとバプテスマのことを言ってるのかしら？ いや、絶対に死者のためのバプテスマのことだ。」

私はガンと頭をなぐられて目が覚めたような思いでした。母とこの教会を結びつけることができなかつた私は、そのことをこんなにも時間をかけて、母に教えてもらったのです。すぐにも電話をかけて監督さんに聞いて欲しいと思ったのですが、いくら何でも朝の4時では申し訳ないと思い、時間がたつのを今か今かと待って、電話を致しました。そのことを話しますと、監督さんもバプテスマの意味だと言うられました。

私は母の死のショックに打ちのめされ、信仰をもぐらつかせていましたが、生前はこの教会を否定していた母によって、またこの教会への信仰を取り戻すことができたのです。

去年の夏、8月14日、私は家族と共に主人の両親のお墓参りを兼ねて、母のために身代わりのバプテスマを受けに行きました。両親のお墓があるのは麻布の仙台坂を上った所にある善福寺です。奇しくもそのお寺と神殿は目と鼻の先にあります。主人がずいぶん縁があるねと言ってくれました。

それからまたしばらくして、母の夢を見ました。私は美しい並木道を母の妹である叔母とふたりで歩いていました。道の向こうにベンチがあって、ひとりの人が後向きに座っていました。その人は私たちが歩いて来るのを見ていないのに良く分かっているという感じで、ゆっくりこちらを振り向ききました。穏やかな笑顔で振り向いたその人は母でした。母は、「私は今さんかいに居る」と言いました。

私はしばらく日を過ごしてからこのさんかいという言葉がどういう意味なのかと考えるようになりました。私には未知の言葉でした。もし正しい言葉であればと思い辞書を引いてみました。「三界」ありました。三界とは過去、現在、未来、という意味ともうひとつ遠く離れた所という意味が書いてありました。

私には今、母は穏やかに霊界に居るのだということが良く分かりました。ともすれば不信仰に陥る罪深い私ですが母を通して、またこうして羊の群に戻ることができました。主の愛に心から感謝しています。すべてを御子主イエス・キリストのみ名によって証致します。アーメン。(よしだ・みえこ 1950年生まれ)

# 迷える小羊に 注がれた光

—教会を離れた16年間に  
たどった心の軌跡—



横浜ステーキ部川崎ワード部  
高橋 昌代

**私**が西宮支部でバプテスマを受けたのは、1962年、18歳の時でした。それからしばらくの間はいわゆる活発会員として教会活動に楽しい毎日を過ごしました。ところが、2年目を迎えようという頃になって様々な問題が起きてきました。特に、念願のBYU留学がスポンサーまで決まりながら実現しなかったのは大きなショックでした。今にして思えばそれらは一つ一つが信仰を確かなものにしていくためのチャンスだったのです。しかし、当時まだ地に足の付いた信仰を持っていなかった私は、そ

れを耐えようともせず、ある兄弟姉妹の結婚式を機に、もう教会へは2度と行かないと決心し、その通り実行に移しました。

それから4年後、私は2度目の職場で知り合ったある男性と結婚をしました。それが今の主人です。主人には教会のことは一切話しませんでした。教会とは完全に縁を切った私でしたが、主人は優しく穏やかな人で、結婚生活はそれなりに充実したものでした。

結婚後数年経ったある日、当時川崎に住んでいた私の所へ、昔、西宮支部で一緒に信仰生活を共にしたひとりの兄弟から、是非会いたいとの電話がありました。わざわざ西宮から、どのような用件で来るのか皆目見当もつきませんでした。夕方の訪問を約束して受話器を置きました。しかし正直なところ、8年間も教会から遠ざかっていた私にとって彼の訪問は、煩わしくも感じられました。

「こんにちは、姉妹」と、もうひとりの姉妹と一緒に昔と変わらぬ、いかにもモルモンらしい笑顔であいさつをしてきたその神権者は、昔なつかしい沼野兄弟でした。

「実は今度、BYUへ留学することになったのですが、その前には是非姉妹にお会いしたかった。姉妹、どんな境遇にあっても、教会員であることを忘れないで下さい。そして末日聖徒であることに誇りを持って生きて下さい。いつかきっと教会へ帰る時が来るでしょうから、その時は扶助協会での前のように一生懸命働いて下さい。」彼は私の心に大きなプレゼントを残して、アメリカへ発ちました。

実はこのことがあった2年ほど前に、私は夢の中で、「末の日は近づいている。心の

準備を始めなさい」という声を聞いていて、沼野兄弟の訪問にはどういう意味があるのかと、深く考えざるを得ませんでした。

押し入れの奥深くしまい込んでおいたダンボール箱の中から、モルモン経と聖書をあらためて取り出してみると、すっかり色あせたものになっていました。朝、主人や子供たちを会社や学校へ送り出してから、それらを読むことが何度ありました。そこに引かれた赤鉛筆の跡には、独身時代の教会の思い出が埋もれていました。教会へ帰るすべも知らず、それから時の流れに甘んじた生活が続いたのです。

2年ほどたったある日、用事があって電車に乗っていた時のことでした。私が座っていた車両に、ある御夫婦が楽し気に話をしながら乗り込んでこられました。私にとって忘れられぬ方々でした。この方々の結婚式を最後に、私は2度と教会へ足を向けていなかったのです。ひと駅先までの短い時間でしたが、この御夫婦との出会いに、私はもう一度、自分と教会とのつながりを考えざるを得ませんでした。

それから2年後、1978年7月、私たちは主人の転勤で札幌に移りました。当時3歳の末娘に友達を作ってあげたいと考え、幼稚園を探していたところ、素晴らしい幼稚園が新設されるということを知りました。早速応募してみると、幸いにも入園できることになりました。親子で緊張しながら受けたこの園の面接テストの時のことは今でもよく覚えています。私たちを面接するために目の前に並べられたふたりの男性を見た時、私は思いました。「この人たちはモルモンに違いない。」ずっと後になって分かったことですが、思った通り、ふたりは当真陸男

兄弟とジーン・山県兄弟という教会員でした。

入園式の少し前に、「すっかり準備ができましたので、お子様連れで御来園下さい」との通知を受けました。娘と心をはずませて園へ行くと先生として働かれるアメリカ人女性が3人いました。その内のひとりに、私は以前の面接テストの時に受けたと同じ気持ちを感じ、「彼女もモルモンに違いない」と思いました。そう思っている矢先に、今度は男の先生が入って来られました。そしてその先生に対しても「モルモン！」と心に強く響くものを感じたのです。「園長の当真です」と自己紹介をされたその方が、面接時の方と御兄弟であることは、私にもすぐ分かりました。

娘の入園準備のさ中、3月6日に私は35歳の誕生日を迎えました。この日は朝から何か心が熱くなっておりました。主人や子供たちを送り出してから、家事が手につかず、どうしようもなく、椅子に座りこんでしまいました。35という数字が頭の中をグルグルとかけ巡っていました。「35歳よ。人生の折返し点よ。あなたの残りの人生をどう過ごすつもり？」と、心の中でもうひとりの私が問いかけてくるのです。この日この時ほど、自分の将来を真剣に考えたことはありませんでした。教会を離れて以来のことを一つ一つ思い起こしてみると、私はそこに神様の愛と導きを感じずにはおれません。そして、おこがましくも、「神様はきっと私のことを心にかけて下さっているに違いない」と思ったのです。

その年の7月、園の一学期終了式当日に七夕祭が行なわれましたが、その日は、教会員だと感じていたあのアメリカ人の先生が帰国するために、送別会も催されました。

「お便りをしたいので、アメリカの御住所を教えてください」という私の求めに応じて彼女が書いてくれた町の名は“Provo”,若い時に訪れてみたいと思っていた、ユタの町でした。胸を高鳴らせながら確かめてみると、やはり教会員でした。私も自分が教会員であることを話し、「きっとまた会いましょう」と約束して、別れのひと時を過ごしました。

1年目の園生活も終わり近く、個人面談が行なわれ、幸いにも園長先生と個人的にお話できる機会が持てました。初めて会った日以来、待ちに待っていたその時が巡ってきたのです。

「誠に失礼ですが、先生は末日聖徒イエス・キリスト教会の方ではございませんか？」と私に尋ねられた園長先生は、「はい、そうです。どうして分かりましたか」と目を丸くして驚きました。私の心は感激であふれんばかりでした。

「秋には東京に神殿が建ちますから、是非教会に帰っていらっしゃい」と、その時

初めて東京神殿のことも知らされました。目の前が急に開けたような気がして、何年ぶりでしょうか、さわやかな気分で、教会に戻れるようにと心から願い祈ることができました。

神様は私が教会に戻ることを望んでおられるとはっきり知ることができましたし、もう以前の私であってはならないことも明らかでした。「教会に帰ろう」と決心し、早速準備に取りかかりました。まず、私の心を教会に集えるまでに高めること、そして主人に理解してもらうこと。あまりにも多くのことを悔い改めねばなりませんでしたが、大変なのは、神の存在を信じていない主人にどうして理解してもらうかということでした。私にできることは、ひたすらに心の準備をし、主に祈ることしかありませんでした。

毎朝5時過ぎに起き、聖典の勉強をし、日中も家事の手を休めて、「教会に帰れますよう、主人に話すべく最良の時を与えたも



●一九八〇年十月、東洋で初めて建てられた東京神殿のオープン・ハウスには一般からも多数の人々が訪れた。また献堂式は、キンポール大管長管理の下に行なわれた。





うよう、主人の心を和らげて下さるように」と心からの祈りをしたことが幾度もありました。いつ話したらよいのか、きょうか、きょうかと、帰宅する主人の顔をうかがう毎日が続きました。話を切り出した時に果たして主人が何と返答してくるか、また変なことを言って逆に心をかたくなにしてしまったらどうしようかなどと考えると、その日が来るのは恐ろしくもありました。

そんな状態が4カ月ほど続いたある土曜日、主人と子供たちが、日曜日にはどこへ行こうかと話し合っておりました。行き先が決まった頃、言うべき時は「今」と心に強く感じるものがありました。「お母さんは明日、教会へ行くから。」これがその時私の口をついて出た言葉でした。長い間、考えに考えていたことを、まさかこんな言葉で話すことになるとは考えてもみませんでした。そして、主人の答えが返ってきたので

す。

「ああ、いいよ。その教会はどこにあるの。」

不思議なほど穏やかで、いつもと変わりない夫婦の会話でした。私はもう何も言えませんでした。そして込み上げてくる涙を隠すために、御手洗いへ走って行きました。

翌日、主人は私を教会の近くで降ろし、子供たちと水族館へ向かいました。その安息日が私にとって人生最良の記念すべき日になったことは言うまでもありません。4カ月の生活ぶりを思う時、あまりにも簡単に教会に帰れたことに、神様のみ力の計り知れない大きさを感じ、ただ驚くばかりでした。そして、あふれる感謝の念で、その日は涙の内に暮れゆきました。

そして10月、ふたりの娘と主人に留守番をしてもらい、息子と東京神殿献堂式へ参加致しました。キンボール大管長と握手をした時は、その靈性をひしひしと感じました。「大管長は、僕の心の底まで見抜いているようだね」という息子の言葉は心に残るもので、彼にも尊い経験になったようです。神殿前での記念写真を撮り終え、坂を下り始めた時、私は一瞬自分の目を疑いました。8年前に私を訪ねて下さったあの沼野兄弟が向こうからやって来るではありませんか。声をかけると、すぐ思い出して下さり、私はあの日のことを心からお礼申し上げました。最もお会いしたかった人に会えたことは、私にとって「偶然」の一言では片付けられないことでした。とにかくこの時は、願っていたことがみな満たされ、大きな証を得て札幌に帰ることができましたが、快く留守番を引き受けてくれた主人には、何と感謝の言葉を言っていないのか分かりませ

んでした。

大切な思い出を胸一杯にして札幌に帰り、11月、12月と続けて長男、長女がバプテスマを受けました。私の最大の望みは家族そろって神様のみ元に帰ることです。ですから、その両日は、自分自身のバプテスマの時以上に感慨深いものでした。

しかし、楽しいことばかりではありませんでした。もし信仰がなかったら、とても耐え得なかったような問題が家族の中に起きたこともありました。それでも「たえず頼り主求む……」と心の中で歌い続け、自分を励ますようにしながら、主に助けを求めました。そして、結果的には、雨降って地固まるのとえのように、家族の絆を強めることができたのです。

56年の夏、思いがけず、10日間主人とふたりで、私の長年の夢だったアメリカ旅行をする機会ができました。子供たちを主人の母や私の母とに預け、新婚旅行のやり直しよろしく、主人とふたり並んで機上の人となりました。満足に英語も話せぬ私達ふたりがとても楽しく10日間を過ごせたのは、行く先々で歓迎して下さったモルモンの御家族の皆様のおかげのためだったと思います。

七夕祭りの日に「きつとまた会いましょう」と言ってお別れしたオールレッド姉妹のお宅にお世話になりました。モルモンの神権者としての父親母親の在り方をこの御家庭の中に垣間見たように思います。夜8時でもうっすらと明るいロッキー山脈のふもとで、リスやハミングバードと一緒に過ごした素晴らしい家庭の夕べの一時を、主人も私も忘れることはないでしょう。そして、安息日に教会に集う人々のうちに通

い合う温かい気持ちは何と表現してよいか分からないほどでした。この旅行中、主人は好きなタバコも極力控え、戸惑いながらも共にひざまづいて祈りを捧げてくれました。そんな主人を見て、私は深く感謝しました。

バプテスマを受けて20年、神様は誠に忍耐強く、必要に応じて心の支えと、手段と、時をこの迷える娘の上に与えて下さいました。そして私の成長を助けるべく思いもよらない方法で、多くの導きと祝福を与えて下さっております。私は、残りの半生を主のみ心にかなう娘となれるよう努力しなければなりませんし、誕生日のめぐり来る度に後悔のない一年であったことを主に御報告できる娘でありたいと考えております。わずかな風にもゆれ動く小さな紙切れのような弱い私ですが、細くて長い道を見失うことなく、ただまっ直ぐに歩むのみです。

主は、誠に生きておいでになり、すべての人々を私たちが想像できぬほどに愛して下さいます。またすべての人々がみ元に帰って行くことを強く望んでおられます。私はそれらのことを自分の体験を通して、はっきりと証することができます。

この5月には末の娘が8歳になり、バプテスマを受けることになっていますが、主人にも一番ふさわしい時が与えられ、いつの日か神権者として家を<sup>ついで</sup>司ってくれる日が来るようにと主に祈らずにはられません。そして、かつての私と同じような状態にいる姉妹たちに私は証したいと思います。主は常にあなたに手を差し伸べておられます。あなたの帰りをいつも待っていて下さるのです。(たかはし・まさよ 1944年生まれ、川崎ワード部扶助協会教師)

## 増築完成なる神戸ステーキ部 西宮ワード部教会堂



「夕 カラツカ」と「甲子園」を近くに控える私たち西宮ワード部で増築のための<sup>1</sup>鉄入れ式が行なわれたのは昨年の2月20日でした。それからちょうど半年後の8月20日に完成し、建物の引渡し式が行なわれました。

この半年間の内に、実に様々なことがありましたが、中でも特筆すべきことは、一番の懸案事項であった建築資金の地元負担額を鉄入れ式からわずか40日ほどで完納でき

●'82年8月に増築完成した西宮ワード部教会堂。敷地：約560坪。建物：既存部分60坪，増築部分113坪，現在の建坪173坪。（写真右上）西宮ワード部山路徹浩監督。

たことです。もちろん、これができた背景には昨年4月の総大会において教会の方針に変更が加えられ、地元の負担額が従来の20パーセントからわずか2パーセントにな

ったことがあります。しかし、このために多くの会員の犠牲と協力があったことも事実です。

さて、ここで増築工事によって具体的に何がどのように変わったかをお話したいと思います。以前は礼拝堂兼レクリエーションホール一室と監督室、台所の合計3室しかありませんでした。それを補う手段として暫定的にプレハブハウス4棟を用いておりました。しかし、増築後は、廊下も含めて内部は総じゅうたん張りに仕上げられ、独立した礼拝堂、ステージ付きのレクリエーションホールのほかに、16もの部屋が設けられました。したがって、今では安息日に、7クラスある初等協会と6クラスある日曜学校とを並行して行なうことも難なくできるようになりました。以前のことを思うと信じられない変わりようです。

建物が増築されるという計画が具体化する頃から、多くの活発な会員たちがいろいろな理由から転出しました。しかし、建物の増築工事が始まり、次第に出来上がっていくにつれて、素晴らしい家族の転入や改宗などもあり、活発会員の数も着実に増え続けました。安息日の集会には、100名以上の出席がみられるようにもなりました。

ところで、私たちのワード部にはふたつの素晴らしい伝統があります。

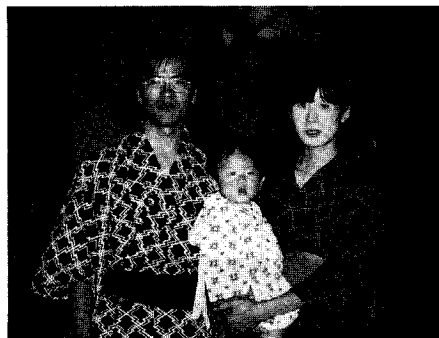
ひとつは「ワード部ニュース」です。創刊以来、多くの方々の努力がうまく継承され今年の5月には10周年を迎え、120号目のワード部ニュースが発行される予定です。

もうひとつは教会の所在地の名を借りて名付けられた「仁川祭り」と称される夏の

夜のイベントです。今年の夏で10回目を迎えますが、毎年たくさんの方々が夜店が出され、やぐらが組まれた会場の中を、色とりどりのちょうちんの下で太鼓をたたき、地域の人たちと共に楽しく踊り、夏の夜のひとときを過ごすこの行事はすっかり地域の中に定着しています。

これらふたつの伝統を大切に守りながら、新しい建物に負けぬように中味の充実を図りたいと考えています。ますます多くの人々に福音が宣べ伝えられ、この西宮ワード部の地域に素晴らしいシオンが建設される日を目ざして全員で頑張っています。確かに、今、主が私たちのワード部に特別な祝福と恵みをあふれんばかりに注いで下さっていることを強く感じています。

閑静な緑深き住宅街の真ん中で静かに息づいている私たちのワード部が近い将来必ずや「タカラヅカ」や「甲子園」以上に世の人々の注目を浴びる日が来ることを確信しています。(レポーター：神戸ステーキ部西宮ワード部監督・山路徹浩・31歳)



●地域にすっかり定着した仁川祭りを楽しむ山路御家族

こどものひろば

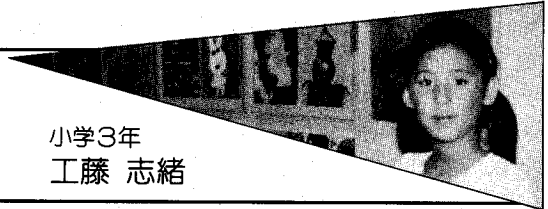
☆あかし☆

ふっかつ

町田ステーク部町田第2ワード部

小学3年

工藤 志緒



日、学校の教室を歩いていたら、友だちが、「人間は死んだら火にもやしてからうめるので、けむりになって天に上がって行き天国に行くけど、動物はそのままうめるから、地ごとに行くんだよね」と話していました。

私は、教会のプライマリーで、ふっかつのことをならったので、動物も天国へ行くことができます。

人間も死んでからふっかつして、またお父さんやお母さんやすきな動物たちと住めることを知っています。

本当に神様が生きていることをしんじています。いつかこのことを友だちに話してあげたいと思います。

ぜんぶイエス・キリストさまのみなによってあかしします。アーメン。(くどう・しお)



☆あかし☆

目が100こ

小学4年

工藤 奈緒



わたしはまえに、ときどき「教会行くのやだなあ」と思ったことがあったけれど、このごろは教会に行き、生きている神様のことを知っていて、よかったと思います。ときどき自分では、かいけつできないむずかしいことがあります。そんな時、神様のたすけをかりることができます。

わたしは5才の時に、遠くの友達の家に遊びに行った帰りにまいごになり

ました。わたしがなくても、大人はじろじろ見るだけで、何も言いませんでした。わたしは、おいのりしました。それからすこしして、5、6人の小学生のお兄さんたちがやって来ました。お兄さんたちは名前と電話番号を聞いて、わたしの家に電話をかけ、家の近くまでおくってきてくれました。わたしは、神様は本当においのりをきいてくれるんだなあと思いました。神様は

一度に大ぜいの人のことを見ていられるから、目が100こぐらいあるんじゃないかと思いました。でも今は、神様は何でもおできになるかたと知っています。

わたしはときどきお友達に教会のことを話すことがあります。去年のクリスマスの際に、わたしの家に遊びに来た友達が、イエスさまのかざりものを見て、「これなあに」と聞いたので、マリヤとヨセフがやどやがあいてなく

て、馬小屋にとまって、そこでイエスさまがお生まれになったことをはなしとあげました。その時わたしは、この事を知っていてよかったなあと思いました。

わたしは神様が本当に生きていて、わたしたちをいつもたすけてくださることを、信じています。いつか、友達にも、このことを話してあげたいと思います。全ぶイエス・キリストさまのみなによってあかします。アーメン。(くどう・なお)



☆あかし☆

## 死者のためのバプテスマを受けて

小学6年  
工藤 美緒

**遊**びに行って帰って来ると、母がいませんでした。考えてみると、今朝、母が神殿へ行くようなことを言っていたのを思い出しました。今日は母に話すことがたくさんあるのに、そういう日に限っていつも母は神殿へ行くのです。おまけに母が神殿へ行くと、夕食のあとかたづけを私が全部したり、弟のめんどうをみたりで、やる事がたくさんあります。だから、私は母が神殿へ行くことがあまりうれしくありませんでした。でも、早く私も母のよ

うに神殿へ行きたいと思っていました。2年半前に東京神殿のオープンハウスに行った時からそう思っていました。

12才で死者のためのバプテスマを受けられると聞いていたので、12才の誕生日をととても楽しみにしていました。そんなことも忘れかけていた去年の9月に、私もやっと12才になりました。その時はとてもうれしかったです。そして、はやく死者のためのバプテスマを受けたいと強く思っていました。

それから少しすると、みんなが死者のためのバプテスマを受けに行くとい

## こどものひろば

うことを聞きました。私もその時、受けに行きたいと思っていました。そのために、かんとくさんと面せつしました。面せつする前から、きちんと答えられるか心配でした。でも、ぶじ私も受けられることになったので本当によかったです。最後にかんとくさんは「当日までよく祈って下さい」といわれました。

バプテスマを受ける日が近づくと、なぜかむねがドキドキして、おちつきませんでした。その時かんとくさんの「よく祈って下さい」という言葉を思い出しました。だから、すぐに祈りました。祈り終わると本当におちつき、胸が熱くなりました。その時、かんとくさんととても感しゃしました。

当日学校から帰ってくると、すぐ神殿へ向かいました。行く時も祈りながら行きました。神殿に着いた時、前から来てみたかった所にいるので、少し

の間信じられなかったけれど、本当に来ているということに気づくと、とてもうれしかったです。

それから神殿の人の話を聞き、バプテスマフロントに入りました。順番を待っている時私が一番年下だと気づきました。他の人はみんな、なれているような気がして私はひとりできん張していました。そして自分の番になり水の中に入った時、少しひやっとしました。受けている時に少し苦しくなったけど、最後までがんばりました。

受け終わった時、今までに経験したことのないような気持ちになりました。また、胸がとても熱くなりました。身がわりのバプテスマを受けて本当によかったと思います。また次の機会にも受けます。また両親やかんとくさんに感しゃします。全部イエス・キリストのみ名によりあかしします。アーメン。(くどう・みお)

### 編集室から／新刊紹介

⇒「各地のたより」「私の証」「職業と信仰シリーズ」「こどものひろば」などの原稿を募集しています。

⇒7月号掲載分締切は5月20日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入して下さい。宛先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室。

### 家族(パンフレット) 改訂版 25円

福音を基として家庭を築くために、数多くの有益な提案がなされている。

### 新約聖書 重版 600円

(福音の教義クラス教師用引き)

### 「聖徒の道」年間用ファイル 新

200円 これまでの背幅60ミリから50ミリに狭められた。

●価格変更のお知らせ：英文改訂版(新刊)「教養と聖約／高価なる真珠」(PBCS0233) 300円→400円。

80 日本語聖書A6判(革装黒) 6500円→7500円。4月11日より実施。



モルモ  
ネード

永遠は、とても長い道のり……  
だから友達を連れてお行きなさい



今日、福音を分かち合いましょう